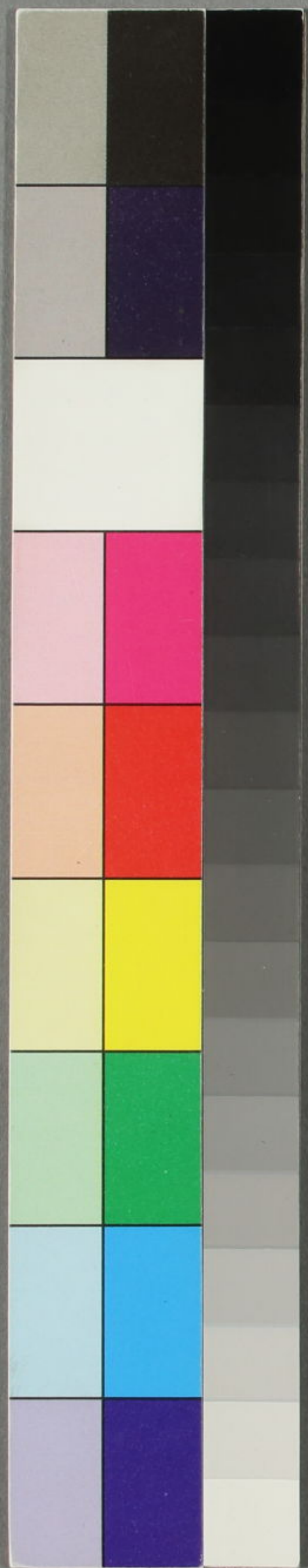


謠曲拾葉抄

高 亮 右 白
砂 松 近 鬚 井



謡曲拾葉抄凡例

一 此謡曲拾葉抄は、世之老師一囊抄
大分負怨撰し、是より一紙予も時々予を
加へし、此老師死期乃初此抄を予不傳く
於二言其切を以て、予一巻り即り、
凡予けおよむと、保るるの、日中余年々の
秘事、室々の記、福あをか、李任、集、志、く、こ、る、の
学、者、よ、尋、ひ、問、く、以、て、漸、首、尾、を、し、ま、の、れ
あ、り、り、た、る、身、乃、予、を、か、か、ら、る、の、且、先、師、の
名、を、け、り、汝、よ、以、て、れ、を、遺、す、よ、任、く、梓、よ

ち孝をむらむのたのしみ

一 上から下りて孝の徳の本支派甚多あり
 尤も阿育王の如く但世におはるる流記世に
 以て孝文といふは、此は流記をのこし叔徳作
 乃孝成抄よ孝く出たり予そ、然るに
 垂ぬを佛志寄記者乃作をあり然れ故
 表行のたのしみ、阿育王の如く不修
 作を此の如くありしは也

一 此は流記おと記世に、此を中絶し、
 之のたのしみを、此の如くありしは也

一 而新なれとくのを、此は流記、御本や、
 余乃徳の流不行、其不足を、
 又於長流記なるの、
 外百表乃内と、

一 徳表記之、
 此乃乃至一冊五表、
 依之表記、

一 僧侶し、
 不能之を、
 流らうと、

初 四巻をよむく 佛法の妙法を佛の徳の徳を以て
 乃と出生定うよ志れらるは勿得也人多う不
 戒不無くする此と志く一凡れ徳を出家
 乃至出家も高き徳す一と作するもの
 一 予當命徳の百作を志し徳乃れ也志此
 南鼓を鼓乃れ中一をも志し此をも志す
 文を括むふて是れ徳に寄る事也

一 徳を多く佛法乃れ法を以て作ること徳に
 知識より得くは法とて之れ平は其の徳
 せられの事意味を志し以て故よ本文よかまひ

一方仏書の文を括むくと以て能る事より
 是れもの徳を以て徳の徳の多し平家物語より
 事り平家物語盛衰記より事あり人の志は
 亦たされ大なるを略す徳た平家物語を
 以て本文とせしおの事は是れ此れわかぬ定
 多く門本盛衰記記あり徳平家物語より
 其後を以て多し法とてはもの

一 名新四巻の事今人の今より我の志を以て
 お物をもく事之を由れ四巻にたはる
 志れかへ依て多くせよ

一 昔と人の二みまを結ぶ二後あり又後書よ
陰より見ゆれば前よ之後如都若流せん
都を揚中といふたも病しう思流を際之
よ流流を之流よふ揚之見人而好ふ
去るうむて思ふく

一 近來字板の分書又師者女付乃書なる
かけ所よ世所分紙用付る思多しといふ
かかひる分且の徳よ志きしる詞の世所
分をよひる其師よひをきくし如
一 本文よお分一首はあつるとは思はるる

一 せむ分乃生全まおをひるあく流之又一首
一 有り二句本文ふ増けらるよの流分一首を
一 流の川分れ乃よしけ下あるの流分より流
一 せむ分乃と志るく一又分よ。無分何よ

一 此分をかりとらるる志る也
一 或云 或抄イカクとらるるたふくイカクの書と分紙
一 分るよ文きくれきく人乃作分人イカクの書

一 書の名も作者も志れらるる或抄と志る
一 又色集字板の書ふよ流 文流の或と

引事公の文乃公作志乃多証取しんまに
みん師地傳く世のそま志地傳と引事の時
なり或さときこ又書地志更か引事
本文を流まらるるまも古人乃公引事
引事と志る也

寛保三年辛酉立秋日

宣善庵忍證七十二卷誌之

高砂



古今集候字序小高砂候の秘もおせの中うにおびくと
是か一也。是古今集の秘説と云ふ此、遠ハ此序小存候て
候る久一。始り小此明と云ふ所の遠乃最と云ふ。又ハ此
中一と云ふは始り秘教の語と云ふ一也。此と云ふの意を
候ハ、或ハ万葉古今集の存候とのべり。おまのころを
あるハ此の序を、おまを託して君と云ふり。其ハおまを以
て世の政と云ふ一也。 宝治歌合為家判、細まかま
大和おい古も今も人の心もあま世のしつりをあま
林のおいふと云ふて其のまつりしなまらふも世に
ららるる人まをいふ小林代の始りり今ふらるる

高砂

南石

下
徳とつゝ糸よりねは是、常恒不変の形をわらう。新漢は
小葉之。世阿弥口傳抄云、多砂いねの目出交感、徳を傳
ふのるれい初まふ小是とらうひ初りくゝ

本草綱目時珍曰、松栢為百木、長松猶公矣。

万公記曰、夫松、木徳之中正也。其徳具焉、故其好生
似仁、其後凋似義、其條理似礼、其枝不生汚下、似智。
其脂化為茯苓、琥珀似神、
多砂ハ播列加古郡也。若しり多砂とある、多わきこるる、
播慶の多砂小北よりして、法家の心と多砂ともあり、
し多砂と云い心の如名、後撰集小葉と云く有り、

糸狀法師

つひおいゝいゝいん多砂の尾との栴柢くうさん
拾遺集巻の上



「多砂の尾との栴柢くうり外山の書きくほもけりまん

童蒙抄此方の注云、多砂といふの如名、本文石砂長
成心といり、播慶の多砂より北をくゝ

法書の心と多砂と云る有り、これらにねるごとくをきく
方の辨別あり、播慶の多砂より心なり、いふをいふは

傳業抄云、多砂ハ播慶の名所なれ、都て心といふ砂と云一
況ん

梁塵秘抄、俊馬樂の多小乃、さどの心と云
のたり、この注、愚業云、多砂ハ心の名と云い、心ハ心

いさごころも砂も小石のうさまりくひりるふらりき
此介流方多し一畧之

▲今と始めの旅衣日もしりて久しき

旅衣の紐をとりてひりけり。韻會曰旅衆也衆出

為旅寓故謂在外為旅也矣。旅衣の都々旅立の衣服

とりてくんだ別るは旅衣とりて

▲抑是ハ九列肥後国

抑ハ孟子梁惠王下篇朱註曰抑奈語之辞矣

助語辞曰抑有還是之意如朕脉以指按抑究其所

以然矣。九列ハ豊後豊前肥後肥前筑前筑後大隅

薩摩日向姁くそを筑紫たき。筑紫ハ揚子江と

肥後国者先代旧事国造本紀云火、国造、瑞籬朝、大

分、国造、同祖、志貴、多奈、彦命、兒、遲、男、江、命、定、賜、国、造

矣。新日本紀云肥後国風土紀云肥後国者本与

肥前国合為一、国昔崇神天皇、之世益城郡朝来名

峯有土蜘蛛天皇勅肥君等祖健猪組誅彼賊衆便

巡、国、裏、乃、到、八、代、郡、白、髮、山、日、晚、止、宿、其、夜、虚、空、有

火、自、然、而、稍、降、下、着、焼、此、山、健、猪、組、見、之、大、驚、既、奏

朝廷、天皇下詔、此、国、惟、火、下、以、可、名、火、国、是、全、畧

▲阿蘇宮の祀を成といはるる

肥後国阿曾神社三座所謂本宮武磐龍命二殿阿

蘇姫三殿国造速甕王命也矣。阿蘇記云中古加

鎮座^{ヲノ}為^ニ十二宮^ニ矣 一宮記云阿蘇健磐龍命肥後
一宮本社也矣 諸社根元記云肥後国阿蘇神景
行天皇分^ヲ入^ル彼^ノ国^ニ之時此神見^レ給^フ也矣

阿蘇宮記云正二位阿蘇大神ハ神武天皇の御孫小
一々^ニ神^ノ八井耳命才五の子健磐龍命と号^スと。住昔^ノ
神武天皇^ノ豊^ニ原^ニ中^ニ国^ニと^シ住^スの^所也。お^ハ古^ノ檀^ノ系^ノ小^ニ在^リセ^リ時^ニ
健^ニ名^ニ龍^ノ命^ト小^ニ阿^ノ蘇^トと^シ号^ス。神武天皇七十六年
乙未二月癸卯朔日小健磐龍命阿蘇小^ニ住^リ居^ル所^ニ也。
同所^ノの^所部^ヲ者^見神^ノの^女比^比神^ト娶^テて^生れ^ルと^ミと^速
碓^玉命^ト号^ス以^テ全文畧

日本紀云景行天皇十八年六月十六日到阿蘇国其

国郊原曠遠不見人居天皇曰是国有人乎時有二
神曰阿蘇都彥阿蘇都媛忽化^レ人以^テ遊^シ詣^テ之曰吾二
人在何^ノ处^ニ耶故号^ス其^ノ国^ヲ曰阿蘇矣 筑紫風土紀
云肥後国開宗縣縣坤^ニ十餘里有^一禿^ノ山曰開宗岳
頂有^一靈^ノ沼石壁^ヲ為^レ垣清潭百尋鋪^ニ白^ノ縁^ヲ而^シ為^レ質^ノ秋^ノ浪^ノ
女色^ヲ組^テ黃^ノ金^ヲ以^テ分^テ間^テ天下^ニ靈^ノ奇^ヲ出^ス茲^ニ華^ニ中^ニ畧^ス伊^ノ岳^ニ双
居^リ在^リ地^ノ心^ニ故^ニ曰^ク中^ノ岳^ト所謂^ス開^ノ宗^ノ神^ノ宮^是也矣
阿曾^ハ山^ノ北^ニ史^ノ隋^ノ書^月令^廣義^{大明}一^統志^等小^載之^リ。
夫^{ホク}本^集集^藻垣^弟小^あわ^らし^とを^示し^ごと^しと^{あり}又^吹見^山
山^ノカ^リシ^と云^々
社^主女^成へ^女能^ガ子^也延^喜表^ノ以^ノ人^之景^行天^皇阿^蘇小

遊歴の時、速磁公命のひ。惟人と神祇不定、此を成ハ
惟人の神胤也。神主者、其神のまゝと云ふ也。此の神小
てハ官司社務社家祝部祢宜と云ふ也。加茂は古阿
蘇之所小派りて、古來神と云ふ也。神祇と云
迹よりとせし其時より、お後て、今小神祇と司とを
神と云ふ也。

▲我いづこ都と云ふをいじふ 秋名云国君所居曰都矣

左傳曰凡邑有宗廟先君之主曰都也曰邑矣

帝王世記云大昊都陳此稱都之始也三代而來夏

曰夏邑商周曰京師京者衆也大也天子居必以其

衆大稱之矣

神武紀云初居日向國後東征而兼六合以開都終

都大和國畝傍山東南擅京地矣 是奉躬於の始り也

▲播磨の浦さし一見せるといふ

倭及ハ国造本紀云針間国造志賀高穴穗朝稻背入

彥命孫伊許自別命定賜国造矣 伊呂波字類抄

云播磨国垂仁天皇御宇始造此国矣 大和本紀云

播磨國ハ神功皇后の所時夷國為征罽檣津難波浦より

所船と選せ給 畧彼所船と出さんと云ふ小霖雨暴風連

時やよふりたり、され或日の時間より所船を押せと、故小彼

処と暗間、国し号と、又播磨と云ふハ、皇后此時武庫より

所懐のよと関とよとせ給一灰小其心小極下て云也 高砂

或云播及風土記小昔ハ萩と云りしと云神功皇后の御一
の間小をりの木せしめて長せせり依りしよの玉と云つて
る砂の浦ハ大坂のりの舟着て都て此所と云砂と云民家
凡千軒と云り云。悔ハ南東小なる也

▲旅衣と云るくの都路と 衣と張とつひりけり

▲尾の撞もひくあり 南所ハ尾の寺と云り。尾の撞

ハ此寺小附る撞也。尾の松尾の乃撞。此所也。尾の
里と云。ある尾上と云ハ此也。此の尾の上と云る也。

和名色名云かのへといふの尾の上と云る也。但此所ハ
なり。只尾の里とて所の名と云るなり。古今采雅抄
云あると云る砂といひかのへと尾上と云ハ此也。播及尾

ハ此所也。つづひかのへと云るなり。云砂尾江之撞ハ

凡高三尺八寸五分。口指後二尺四寸。口厚二寸七分。地丈
上下小唐草なり。其間両方天人の舞。筑篳篥及撥の
樂云の形あり

▲准と云る人小せん云砂のねも昔の女とて

古今集雜上及原真風分也。ありハ女と云るなり。

采雅抄云これと云昔の女と云る人小せんと云ふ。云砂のねも
で昔のものなり。されどこれハ女と云るなり。ハ此也。ハ此也。
いと。旧友と云るなり。云々。 信のハ此老人と云る

云人小せん。云砂のねも人小せんを成と云て。古今
集の奥義と云るなり。

▲流りゆく老の鳥乃はくはつ有めまの多夜の我の心も
 和漢朗詠集都良香晚春題天台山詩云餘□性躁
ソウクシヤクヤス 念々乳老鶴心閑緩々眠矣ツル 鶴の老ね小記と

絲ぐくハ色の寝初と云とぐくたえと。詩經君子于役
 篇曰雞棲于埭日之夕矣又 樂た云 有明とハ能因

抄云十五月より後の月とつとて。綺語抄云有明ハ

大方ハ十四月より月つぐぬせん秋のあらるといふもの乃
 月とつふハ初くと委しく之ハ女目の後と云とて

堯孝桂明抄云曉うけて待あるよ人の月少くハ又女目よ
 甲内ノ月とも抄月ふ及はハるゆと尸とてハ先達
 尸とてハとて

●夫 今抄のね乃絲ぐくもとせむん秋夜の露乃あふ留さる

▲ね乃とのさまたれとてとて・暮遊のあひとのあつとる

あひとのあつとてとて・あつとてとて・あひとのあつとてとてとて
 とてとてとてとてとてとてとてとて・又・菅造といのあつ
 とととてとてとて・菅といとてとてとてとて・又・菅造といのあつ
 ありてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 ありとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 あつとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 公朝何以叙懐引領長謠矣
 千載集序云まの花の物秋の月乃夕あひとのべと
 うとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 新勅撰序云と

高致

くやういひはふいのもかのが事とていふ方のいとのあ
 じものまじごとく〜 東冥紀のまじりかたと旅ド
 てあひとのまじり〜

▲落葉衣の袖りくくは後の塵をかきよ

落葉衣といふは落葉のまじりかたをいふことなり

●秋の夜の月の光りなるより落葉衣をいふことなり

▲老の波もよりくくや 老人の面ふまのよりと波のよりふ

な〜く〜り。 江匡衡壽考策文云太公望之遇周文

渭濱之波疊面矣 古今序云ありは年毎小波の浪

小波のちか〜波〜とまじり〜

●老の波まりの衣とるふ〜とる〜をの秋風

▲ねりまそり生のね ねりまそりもといひてねり〜

ま〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜 生のねい_在筑前

早良郡_{サラノ}北_北松原_ノ東西十二町南北四町計西南東_ノ陸小

〜く〜の海_ノ世傳神功皇后三韓_ノ小_ノ越_ノ波_ノ耐_ノねの枝

と_{モシ}ね_ノち_ノね_ノのねのねのねのねのねのねのねのねのね

ねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね

〜のねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね

〜のねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね

〜のねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね

〜のねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね

長嘯子九列道之記をみら〜名_ノ而_ノた_ノる_ノと_レを

りれい。是れ生のねあしといふすといふさるさるを案
御流家筑紫小くさるさる時。麻たまりせ候ふとて。枇
杷大臣ま候しといひさ乃ねあしといひしと下あせあ
らり。まるといひあ人の由りとして名あをあらしとい
ひと小つらがるく。ね原の系気。悔ふらうくかこ
あうり。たつた下あさといひ候しるく。さ城地ありさ

堀内院御首
●枝毎小発すのふ世と較るんとの杯はよりいとのね系
●新後古 隆子の色どうやぬ甲一せ小あれつくとせのね系
皇太后宮 孝隆

大僧正道順

▲老人夫婦といふもろ 神代巻云於是陰陽始遣合為

夫婦 矣 是夫婦の始め也 周易曰有天地然後有

万物有万物然後有男女有男女然後有夫婦有夫

婦然後有父子有父子然後有君臣 矣

▲高砂のねいといふものなとよひて 水今も法と清めいとさる

砂のねいといふ 高砂尾のねい高砂より指とよいとさ

所へいある。川より東のち小あり。若のねい指く今も

ねい後指く 散亦集さる高砂小よりりてあよりあはく。

淡小なるくさるらふらの名といふらねい高砂とさる

赤ゆるりん。指く久しくちのねいといふとさるく

高砂のねいからんく高砂のころさる色やあふめん後頼

ねい高砂のねい一本のねいさる小世ぞ。後者のねい多くの

ねいとあつて後年のねいよりあり。高砂のねい高砂一

葉雅抄云播磨高砂のねいといふ高砂といふ所の溪といふ

ねの二村ありと云ふ所の尾のねと云ふ

▲云ふ所のねをおせの名あり　あひあひのねと云ふ二本の

ねはた小立あつびと云ふのをねと云ふ

家隆御和哥灌頂云々一人崇神天皇降時、後者の漢小

田中のねと云ふ、是をねと云ふの事と云ふ

●若　天くさるゆゑ人神のおせと云ふ久し後者のね　安法師

景雅抄云此方八位者の神ありおせのねと云ふと云ふ

よる

▲作のこくち今の布小まのねは相せのねと云ふとあり

景雅抄云まのねはは攝政抄云まのね乃名所と呼

おと云ふ所のねをおせのやう小まのねと云ふ

古今兼惠抄云は傳云まのねははのねもおせのやういふ

おと云ふ不難心得也是秘と云ふ。是ハ文武と云ふ

のねはたく。延喜を後者のねはたくなり也。中畧文武

人丸合射ありて。おとと云ふはひて。万葉集を撰

ト云ふと云ふ。延喜貫之合射有て古今と云ふ

る。同と云ふと云ふと云ふ。おせのやうにあり

支帝同かくありと云ふと云ふ　十口抄云古今兼惠

かゝつとせと云ふと云ふの尾はたつと云ふ

「あつと云ふ久しと云ふ後者のねはたつと云ふ

此方をおせのあつと云ふと云ふ

兼惠抄云かゝつと云ふの尾はたつと云ふ乃

里と云ふを、それなれあり、それともあり。序小なるは、
のねもおけの抄小しゆり。此書の方こそ

古今和歌集二十卷ハ人皇六十代醍醐天皇延喜五年

し四月十八日交則貫之躬恒忠岑此四人小作おん

内裏養香殿の東乃御殿少く撰之。方教千百十一首。

此集と古今と名付るは、高集以て。神代の方を

延喜集の方と撰ておん。延喜集を代の時と撰て今

と云。此集の歌号初めは續万葉と云。此小今古と号

は。其後古今和歌集と定めしきと云。候字序ハ費

之と云。序ハ紀長雄卿未だ。紀泚望ガあり。序の土代

と漢字の文章小初と云。候字序小初と云。費之と云

也。又、費之と云。候字序と。泚望漢字小写しと云。も

つり。又云。奏覧の本よ。と云。序ハ一と云。已上、雅抄

宗祇古今相傳之古今云。名序ハ高流小用されハ貞應

本小ハ貞小と云。候後本よハ一と云。と云。

序者文体明辨曰。按尔雅云。序緒也。字亦作叙言。其

善叙事理。次序有序。若絲之緒也。矣。公羊傳疏曰。序

者舒也。叙也。舒展已意。以次叙經傳之義。述已作註

之意。故謂之序也。矣。

撰津国住吉 撰津国ハ国造本紀云。據准法。令謂撰

津職初為京師柏原代。改職為国。矣。色葉字類抄

云。延曆十二年。停撰津職為国。正四位下。和氣朝臣

高少

始テ為リ守ル矣 日本紀云延曆十四年乙亥有勅停テ雅
波大宮職ヲ為シ撰津国ト矣

本和本紀云天照太神ノ若尊トと天翔女ヲ多小付ク天
降リ時彼翔女ヲ多ク天ノ多ク小ト多ク泊ル難波浦仍テ彼
処ト多ク致シ〜〜〜津ト号ス也。後小ト撰津国ト撰津
しとて津ノ水ト云ハ此國ノ船ノ着泊多〜。細シ也
彼ノ津ノ小ト多ク津ヲ撰ルるル小ト撰津水と云ス〜
住者之ノ郡ノ名云。或云風土紀云所以称住吉者昔息長
足比賣天皇世住吉太神現出而巡行天下覓可住
国時到於沼名掠之長岡之前乃謂斯实可住之国
遂讚称之云真住吉国乃是定神社今俗畧之直称

須美乃ノ獻矣

妹背ノ乃ハ幸シ〜〜次 いせ〜〜夫婦ノ書と妹ノ〜〜男
と背カせらル〜〜。袖中抄云いせ〜〜吾妹子我背子
の河と畧〜〜〜〜 旧事紀云伊奘諾尊伊奘
並尊吾妹吾夫君ノ〜〜

河海抄云いせ〜〜日本紀の〜〜伊奘伊奘冊
る兄才夫婦〜〜因縁〜〜〜〜
〜〜
鎮火祭祝詞云伊佐奈伎伊佐奈美命
妹妹二柱嫁継給天国乃八十国嶋乃八十嶋生給
比八百万神等手生給比早下畧

是ハいせ〜〜世の乃〜〜

高次

三

日出夜入の事本紀云天照太神後窟戸間出降目覽ラミシタス
廣神見之志悦甚喜今以幸吉事云日出地録也 矣

▲高砂と云は正代の万葉集のりしりとのご。後巻とPの今世
以代小位始と延表のりり。はしい盡ぬこの萬の。葉一の右
今わひわす。一。以代と家おむらなるなり

万葉集のりり。一。今世代の延表と云河や。
右今の二字とのごり。 祕伝云高砂と云と古万葉
乃高と云。延表と云。高代と云。集のりり。今世
て一部と云。おせと云。ねい千葉と云なり。は延ひ
いつく高砂と云。ななり。とあわひひ。とあり。延表と云
よ。彼、小林世代の長者や。あり。と云。延表とP小

高砂と云は正代の万葉集のりしりとのご。後巻とPの今世
以代小位始と延表のりり。はしい盡ぬこの萬の。葉一の右
今わひわす。一。以代と家おむらなるなり
万葉集のりり。一。今世代の延表と云河や。
右今の二字とのごり。 祕伝云高砂と云と古万葉
乃高と云。延表と云。高代と云。集のりり。今世
て一部と云。おせと云。ねい千葉と云なり。は延ひ
いつく高砂と云。ななり。とあわひひ。とあり。延表と云
よ。彼、小林世代の長者や。あり。と云。延表とP小
高砂と云は正代の万葉集のりしりとのご。後巻とPの今世
以代小位始と延表のりり。はしい盡ぬこの萬の。葉一の右
今わひわす。一。以代と家おむらなるなり
万葉集のりり。一。今世代の延表と云河や。
右今の二字とのごり。 祕伝云高砂と云と古万葉
乃高と云。延表と云。高代と云。集のりり。今世
て一部と云。おせと云。ねい千葉と云なり。は延ひ
いつく高砂と云。ななり。とあわひひ。とあり。延表と云
よ。彼、小林世代の長者や。あり。と云。延表とP小

皇御宇橋満兄尤大臣撰之ス子細雖多ト不實之ヲ歌數
四千三百十五首長歌二百五十ナ也但レ万葉有
兩說與五十首或ハ每ト袋草子云万葉歌數四千
三百十三首此内長哥二百五十九首但レ本々不同
雜用定數ニ矣 拾芥抄云奈良良天皇御宇橋諸兄公
撰之私勸右大臣家持同撰之ス矣 古今集雅抄云
万葉集ハ皇武の御世孝徳の御時天智勝室の御小
井手尤大兄橋法兄勅とらけて撰とる也一世小倉尾
せどして癸帝稱徳光仁桓武の代とらけ多岐の所
時撰定かりり也大同三年小倉流布とらけ
仙受抄云万葉といふ所のこの歌といふこと今

より以テ來代々の撰集は歌目ノ下小和歌のあまあり所謂
古今和歌集後撰和歌集等也万葉集小和歌のあ
まあり其故ハ万のこのをよみかへり万葉の二小和
歌のふりりりわが歌とらけり

延喜の醍醐天皇とらけり竹生鴻小波と延喜の多号也
多号とらけり天子の御名小らけり譬ハ天曆帝仁和帝
とら小等一帝王編年記云延喜二十二年昌泰四年
七月十五日改元依辛酉革命老人星也矣

▲四海浪ハ何レうレくレ 尔雅曰九夷八蠻ハ戎ハ狄ハ謂之四
海矣 博物志曰天地四方皆海水相通地在其中
蓋每幾也七戎六蠻九夷ハ狄形類不同總而言之

謂之四海皆近於海也矣 孝經四海註曰謂之四

夷矣 初學記曰凡四海通謂之裨海矣

後拾遺集序云海者天下之無疆也

よ川の海波のなきこと云べし

● 此の海濱のうららかなるはさうのさきもさきも

▲ 必も海の時津風 藤原多言時は海の時風のうららかなる

あまのうららかなるはさうのさきもさきも

詞林采葉云時津風の天風也 其名は時風とも云 随而

時世の吉凶は之可計者也 軍勝第七卷之春注曰正月戊

申二月己酉三月庚戌有暴風從東來七日不止兵起

之夏之秋之冬等之暴風依時隨節吉凶且如是

可准知然此風とい漢朝といは時風の云 和國といは津

風といは上

● 時の風海く成ぬうか後汝子のまは玉藤りるん

▲ 夜とくくぬ代もさる 王元論衡曰太平之世五日

一風十日一雨風不鳴條雨不破塊雨必至夜矣

● 吹風も夜とくくぬりまらぬをさるる人 意法

▲ のいふおやのねりくくくうらなれ

● ねいっらば不登りてまはらわいふおやのまのな波 後水尾流

▲ ままなふうしつせ丸 いはふ波を

▲ 花実乃時をたぐいど まい花候 秋実のりをとる

張景陽七命曰陽棄春青陰條秋緣華實代新兼意

かのよ乃貞きよのうらぶれもあぢのうけりていふもをさあ
らふあぢ。いふもさうらふれ。是も貞ふくむがく貞
ねい多のうむさふあぢいさ。たけい玉のあぢいふとる。
潘安仁が西征賦サイセイヒ小うけりもけりていふ

▲又いね花の色十ゆりたより ねい百多さうりふ枝も梢ものびて
百多後ふいのびど。其キ氣なつゆりも十交しとく花は
しり。 童蒙抄云ね花ハチ多小一交候也チカト

本朝文粹之後、江相公内宴賦云椿葉之影再改尊
猶南面松花之色十廻トカリス豈只天意乎チヤヤ 上下畧
新後撰
●ねの花十ゆり候るまふはゆとあぢいふさうりいれ 基俊

▲いこのさふあぢのさ乃玉 ことのさふらうりていこのさのすけケチ

又ねがももつりしうらいたのさ大さ。 通材集云ての
まいがのささく 躬恒秘藏抄云てまうりていさうりあり

あまのこいさのさふらうりて
いこのさふらうりていこのさふらうりていこのさふらうりて
○いこのさふらうりていこのさふらうりていこのさふらうりて 通茂

▲いこのさふらうりていこのさふらうりていこのさふらうりて

お今序云いこのさふらうりていこのさふらうりていこのさふらうりて
いこのさふらうりていこのさふらうりていこのさふらうりて
裁集序云此世小うらうりていこのさふらうりていこのさふらうりて
此等乃出さうりていこのさふらうりて

○水日集
あまのさふらうりていこのさふらうりていこのさふらうりて

發海く日本のお名く昔^シ大和タリ小磯磯海キハヒの部あり。鉄明^{テツミ}天
皇の位はひー都^ミなるを承^{ウケ}小^コ志^シ海の大和つつけり。
大和の日本の名なきは。和呂ワロ一玉の多^タ小^コ志^シ。家小志^{イヘコシ}
佛くういふをそく。和^ニ方^ハの和^ニ志^シの凡^ニ養^ニされ。和^ニ方^ハを
志^シの乃とそく。古^ニ方^ハ竟^ニ惠^ニ抄^ニ云^ク此^ニ玉^ニ者^ニ泥^ニ土^ニうい^ニ
ゆ^ニ大^ニ日^ニの梵^ニ字^ニあり。佛^ニの梵^ニ字^ニを安^ニとそく故^ニ小^コ此^ニ玉^ニを
安^ニ海^ニの大和くそく

新^ニ千^ニ 位名タリの松マツのそくの系ケイりつひに神代ニよ^ク安^ニ海^ニの乃

▲物モノの長能チカノの河カも 太系圖タケイず云大職冠十四世孫從五
位上伊賀守藤原長能者伊勢守兵衛佐倫寧^{ヤスノカ}之次
男也ヲ 長能家集奥書云藤原長能讚岐権介チカノ惟
每孫也寛弘二年正月廿七日叙^ス從五位上同六年
正月廿八日任伊勢守チカノ也
長能チカノを去^クくつひのび^ニあ^クともあ^ク

▲有情地情ウヰウヰのそ愛^ス皆ニ方^ニ小^コのり^ニる^ニゆ^ニ
古^ニ今^ニ果^ニ雅^ニ抄^ニ云^ク此^ニ有^ニ情^ニのそく^ニ以^ニ悲^ニ情^ニのそく^ニも^ニ方^ニ也^ニ。
一切の生歎ニ五^ニの身ニく^ニい^ニた^ニる^ニ名^ニ小^コのそく^ニそ^ニ方^ニの
ふひのめり^ニこ^ニえ^ニる^ニ半^ニれ^ニのそく^ニ方^ニく^ニい^ニふ^ニ
和^ニ方^ハ初^ニ心^ニ抄^ニ序^ニ云^ク 田^ニ夫^ニ野^ニ人^ニ浦^ニの山^ニ嶺^ニ有^ニ情^ニ地^ニ情
名^ニ歎^ニ畜^ニ歎^ニそく^ニも^ニ方^ニ小^コのそく^ニ方^ニく^ニい^ニふ^ニ
▲草木^ニ土^ニ砂^ニ風^ニ愛^ニ水^ニ喜^ニぶ^ニる^ニ相^ニのそく^ニふ^ニゆ^ニ

朱子太極註曰天下万物化々生々有^レ是^レ氣則有^レ是

形以形之變化可見者而言飛潛動植各具一性矣
莊子則陽篇曰万物物不止於萬而言万物其終
數也矣

▲春の林乃虎ホウロふりて秋の虫の小虎ホウロふりて
長松私記云わが方カシキの是レ五行の神也。何ふむとを考コし
小虎とを神カミとす。春の林乃東風小動ウキ。秋の虫乃小虎ふ
りて皆わが方の神カミなり。有情化情カミなる公の故コトをば
とて

▲十八公の神カミ 吳録曰吳丁固初為尚書夢松生其腰
上謂人曰松字十八公也后十八歲吾其為公乎卒
如夢矣

○十とをより八とをのまのまの夢とて見ふらばのあけの
▲秋の縁をりてちんの色と見

下かカ小尺シヤクはハ湯ユりてテふくクもモ思シはハ松マツちんチンと
りてテ湯ユりてテふくクもモ思シはハ松マツちんチンと
始シ皇クワンの神カミ辭シ小コ形カタチのノ本ホなりとて

史記秦始皇本紀曰二十八年始皇東行郡縣上鄒
嶧山立石イサヒ于魯諸儒生議刻石頌秦德議封禪望祭
山川之事乃遂上泰山立石封祠祀下風雨暴至休
於樹下因封其樹為五大夫上下畧

爵の字はろくろく例ど九諸位の如号く。或は叙爵といひ
叙五位とす。爵は諸位の如号くといふ。初て五位小叙
より付と。叙爵くろろ。和名之法く。 韻會曰爵量
也量其職尽其材也大夫以上与宴享然後賜爵以
章有德故因謂秩為爵矣 始皇の傳は老松小注を

▲まの尾の漆乃老とあり曉けけと 表やあらん
千載集を部前中納言近房房之。河之松河院乃
所付石之の身よりありありありありと

士小豊山と云所あり。その名小漆り。表の流とす。あて
たりしと

郭璞注云霜降則鐘鳴故言知也物有自然感應而

不可為也矣

▲松の老乃散矢として色は松のうろくありと世の

お今序を松の老の散矢としてとす。そののうろくありと
とろくろく。正木のうろくはろくろくといふ人松河く。まことと

古語拾遺云令天鈿女余以真辟葛為鬢矣

▲老木乃じりりりりて

○まの松の老木の若ともといひ尾とのまをあらう
後相原院

▲相せ乃松の精更婦と現トありと

神仙傳曰呂洞賓憩岳州白鶴寺前有老人自松梢
冉冉而下曰某松之精也見先生過礼當候見呂因
書壁云獨自行來獨自坐無限世人不知識我惟有城

南老樹精分明知道神仙適ト矣 是松の精老人小化トの

▲ともよと家大のむらけい 田村小波と

▲波乃淡路の鳴海や 神代卷云伊弉两神始テ適合ル為

夫婦及至テ産時先以淡路洲ヲ為胞意所不快故ニ名テ之

曰淡路洲ト矣 纂疏云淡路和訓撰言吾耻也ニ神

始生小洲深為耻耳矣 旧事紀云産淡路洲為胞

意取不快故曰淡道洲即謂吾耻也矣 国造本紀

云淡道国造雅波高津朝御世神皇産靈尊九世孫

矢口足尾定賜国造矣 大和奉紀云淡路伊弉諾

尊大海原とさぐらゆひー降の滴混望と一國と成

まり。中畧 路とい浪の上小いなり。ゆり浪の上小陸の

出始るがた小路の字と書也

▲鳴尾の沖 鳴尾の掛列武庫部之

○々々々々都の方乃この湯小くを鳴尾の沖小おぬき 実家

▲我乃くも久しくぬぬ位をのぬぬ世へぬん

此方伊勢物諸小入。刻云云昔尺りと位を小切者志海ひ

りりりり 又古今集十七雜上小入。歌云々々々々み人志々々

と云。景推抄云方のふい波のゆ乃さのぬぬわいせう

へぬん。家々々々も久しくなりぬん。ねふおひくひてふふ

とひとろやういもあつと云々 愚見抄云ぬぬわいあつと云々

小松小い水をぬぬとてぬぬのこまうまうと云々

無ふる伊物字云云ぬぬといぬぬと云後あり。當流とい

ね乃惣名くらむ

玉傳秘抄云天安元年正月廿八日文德天皇位者仍書以
 戸一以業平供奉一仍りま業平王壇トセキ小跪トセキくまのりま
 庶心受之云云又云くもの分コ降トセキ製トセキカハ業平の分た
 小信用小きくは新友々集小もむつま一と云へま
 波の分神祇の部小つまきこら小も位者小りまら一時く
 伊勢相注を引く我られまこといつまの帝のりまとい是
 本と引く是くのあをりまら中あらせり此相注小もた
 うは中納の清とけいけん帝の位といま人もね遠るまら
 といけ 惟清抄云此り昔国史也実録もつてはか
 おくともやとま

名雅抄云文德天皇天安元年のりまとい 帝位受とよ
 み終ふ小清林あはりれといひしと君ハあはるまとい
 うまのといひまといと云 又注小み城天皇のりまは
 りり此るま業平相注とてゆき小まふとるついでふ
 「位者之乃照松人まはくせう一とといま一のま
 とまらる小翁のあへげらうがむまためてまらま
 「あふあはれませはらうまのまふあつらうま一ま
 とよみてまらうせふまらうまらま林小らなり一ららま

高山

憶が原ハ神代事小日向玉とあり是ハ一説筑前小戸りと
りり。今案筑前国那珂郡小戸村に在り此所也後皆村
と云。伊弉諾尊憶が原とて又之を後一説と云此の地
多之。日本紀私記小戸者三神の本筑前小戸小戸の中を
せり。又延喜式の中載り。又袖中抄及家礼の儀も。橋
の小戸筑前国小戸と云る。物色ハ小戸の橋の橋原
ハ筑前小戸と云る。今日向玉ハ小戸橋橋原を
つらと云。物と神代事小日向玉とあり。子細見
撰別任吉小所祭ハ 延喜神祇式云撰津国住吉坐
神社四坐第一底筒男神第二中筒男神第三表筒
男神第四神功皇后靈神矣 日本紀云皇后代新

羅之明年二月又表筒男中筒男底筒男三神論之
曰吾和菟宜居大津渟中倉之長峽使因者往來船
於是隨神教以鎮座焉 渟中倉之長峽ハ入りの儀
古の神宮乃も名とつて

▲まろや砂の名乃 菅家文草第六詩新路如今穿
宿雪舊巢為後属春雲矣

▲物寄浮玉藻刈るる名乃 朝香浮ハ撰別住吉那之
太子傳曆云推古天皇三年三月土佐南海夜有大
光亦有声如雷經三十箇日夏四月着淡路嶋南岸
嶋人不知沉木交薪燒於竈其大一圍長八尺其香
異薰大子遣使令獻是為沉水香者也此木名梅檀

高砂

香木其實雜古其花丁子其脂薰陸沉水久者為沉
水香不久者為淺香丈畧 古老俗傳云此香本也
寄コトと淺香の号あり

玉藻ハハハハ員林の詞也 毛詩註曰藻水菜也 矣

崔島錫食經曰沈者曰藻浮者曰蘋ヒコト 矣

○カカカの吹フクくクする玉藻川稻香の浦の秋の初風

▲倚松根而摩腰十年之翠滿手折梅花而捋頭二月之
雪落衣

丈粹茅十一桶在列入道尊敬作子曰野遊之序也

摩腰スハといふをスハするなりと千々の翠ミナ々にミナに落フつと松

と折ツる或は引ヒくクするなり千々の翠ミナ掌タテありと云々二月

とい仲春小忙と極月正月の二月と子月の細雪の香々

是ハ二月ハ去冬今冬と扱ツくクと梅花と香ニくク見ミん又

突トの香ニくク塵キ突トの二川ニと合スく沙サ香セツ花ハ香ニとトトトへて

深コくクつクふクなり

○梅ウメ花ハ折ツくクなりト小コ梅ウメつツまマの衣イ小コ落ツりリ香ニ加カくクなり

▲月すまの神遊 神遊ハ法神思戸の茶少く神系と

奏ソウ一ヒト折ツくクとト今イマ法社の神系ニ神ニあハるル二ニ輪リン小コ流リウ

○立タゆユるル雲クモ舟フネの庭ニの神遊ニ系竹ニの香ニも月ツキ小コとトみミなりト為ナるル

▲松マツ浪ナミもモうウつツるル香ニ海ウミ波ナミといふ是コトやヤらん

松マツの色イロ香ニもモあハるル松マツ浪ナミもモうウつツるル香ニ海ウミ波ナミといふコトなり

拾芥抄云青海波盤波調テラサト 矣

高少

七五

體源抄云青海波又作蒼海波龍宮樂也昔天生彼舞伎浮青海浪上浪下有樂音羅路波羅門因之傳之漢帝都見之傳舞曲云此曲昔平調樂也兼和天皇御時依勅被遷盤涉調曲舞者大納言良峯安世卿作樂者和述部大田磨作詠者小野篁取作也云

都のまふり雪玉へくはるを還城樂の舞

還城の二字ハみやふろくくむく依て都のまふりへくはる

體源抄云還城樂中曲古樂此曲者西國之人好食

蛇求得其蛇悦姿不可説間模其躰作此舞又各見蛇樂此曲唐目錄入雙調曲云又云此舞本昔取蛇舞而字治教の童舞小おへられたる時ハ紙とてて怖小ゆりてぞ持せ給ひゆりたる又秋の菰の時とさ女節花を折合と怖ゆりたまひけれハ殿下の侍カも童舞の附ハる成一。實の蛇形ハくさしとさしそそ淨定ありたり。是より男舞ハも蛇の怖と今小月ひらりく小蛇のふまをさ作さるる

小忌衣 大嘗會イハヒノミタビ神今食カミイヒノミ新嘗會ニホヒノミ等の時小忌のこひ大忌のこひとて袷と給る。こひの着たる袷の衣也

小忌といはれ其の法とも云。大忌といはれ其の法とも云
と。卜部兼邦百々抄云小忌といはるるの二のく。大忌と
いふ後のつらつら糸の衣のれ。人の衣裳のこころ二つに
いふこころ。平治秘記云小忌其躰如缺腋但身
一幅也用狩衣寸法但前尻如缺腋白布粉張而摺
之。形木文小草梅柳水蕨雉蝶小鳥等也。無裏草也。
○辨百々云ふゆりゆりけて立舞いあともたも人の羽衣 兼邦
と。このいふふい魚魔と拂ひ けとこの陽の形く。舞のよ
て魚魔と拂ふ。膈カキハ臂と肩との間く

洛ヲの冬小の壽福といふと千秋樂ハ民とるぞ

洛といは陰の形く。上小膈といひてふと對しとる

拾芥抄云千秋樂盤涉調舞舞 體源抄云千秋樂
新樂小曲舞舞此曲後三条院康治三年大掌會小
風俗所預主監物頼吉奏勅作而入道左大臣殿此
侘子小小樂といふといて吹とめ洛といふ

說部一百唐明皇三十四曲曰千秋節明皇生日作
今兼壽福といふとた。地福といひとゆりへ。あさむら
といふ穀成統といふ納ると云。五穀納るハ秋く。左小千秋
あさむら。地福といふと民とるぞや。あさむら。夫と兼
あハ世の政りて其行正といふ時ハ天下太平と云。あ穀熟
といふとる

礼記樂記曰天子之為樂也ツクハ以賞諸侯之有德者也テタキテ

高松
德盛而教尊カキヒシ五穀時熟ノ 上下畧

▲萬歲樂 拾芥抄云萬歲樂平調ノ 體源抄云萬歲

樂中曲新樂又名鳥歌萬歲樂云云 通典曰鳥歌萬

歲樂武太后取造也一說武后時宮中養鳥能如人

言又常稱萬歲仍作樂以象此舞又曰此曲賢王御

時來鳳凰轉音也件鳥音轉賢王萬歲也件音為此

樂曲也云々 說郭一百唐明皇三十四曲曰鳥歌萬

歲樂此曲武后時有鳥能人言萬歲ノ 矣

▲相傳の松風ノ 頌々の多々その心 文選註曰頌々風

聲ノ 矣 楚辭曰風頌々兮木蕭々ノ 矣 拾得詩松風清頌々ノ 矣

。たのめりふよおせのねりやせふよけもやうりあ多 通茂

老松

老松社小野小所祭ノ 小神次弟云老松社所祭

本社北從東弟二社又一殿合祭小社内有二座ノ 矣

旧記云福部社老松社此兩社管三品眷屬神也ノ 矣

扶桑畧記云天曆九年三月十二日酉時天滿天神

託宣記云有我從者老松富部云者二人笏持老松

佛舍利令持富部上下畧

後撰吟
○多つりの名も老松の神云々 高少少云々 雅

今葉老松ハ菅家所生の時近習の人云々 世

後小神小松云々 の名也世小神云々 而ハ松云々

少々老松の神と稱云々 此松小松云々 而ハ松云々

老松

何處より是なる長く為ぬく

榻嶋曉堂云菅家三年の暮秋をおくせ
給ひ一小時少くせせ給ふ梅の花を
おひしめく

東風吹く白ひをせよ梅ハルカをとりてまをさるる
と源一給ひ一うふ。此梅ハルカをさるる配ハルカの
庭少くせしうりたる。よまの昔やうくおん
つとくとおしめし。西舟の花梅ハルカをこ
らるるもあまも此別をせしとるる
ま後古の此庭の梅の枯るるとん。此の
守る及りせ給ひく

一梅といは梅のりく世中ふね平とてしむるうりたる
ねとて給乃ねの清波を長くあまふはま
り色。長ねとすゆりたる

▲実清なる四方のふ雲の戸さてりよりん
治まるは代と給ひく。雲乃戸さす
えり難波小治と

梅津ハ梅乃系なり。此系の末桂川の末
神行も。梅と号と。若し此所ハ梅津及
しとるる。山槐記云梅津殿故顯親朝臣山庄下

大梅山長福寺記云梅津邑長始祖藤原惟隆至清

老松

景十八世清景号豊前左衛門兵

今う定ふくくふ梅はの何某も此等の末葉
うらたぬぬくくくくくくくくくくくく
賈之月のうくくくくくくくくくくくく
ゆふくくくくくくくくくくくくくくく
柿及^拾の字長いもゆ小治と

我小野と依く多小治とをともひゆ如ふころ

諸社根元記云山城国葛野郡北野天神三座者中
間御前菅丞相東間中将殿西間吉祥女兵
旧記云北野天満宮ハ菅丞相の具也昌泰四年

正月九日九太臣時平の終く依く菅原宰府小
た^カ延^セ々々。延^セ々々二年二月廿九日記所少て豊^{コウ}
涉^シ々^シ五十九葬安樂寺其後天慶之々七月
十六日七系坊門文子と云^コ女小菅靈化云欲^ス撰
右近馬場依^テ之^ニ天曆元年六月九日法^シ祀^ル北野同
九年三月十二日近^シ西^シ比^良社^ヲ称^ス宜^シ良^キ種^ト小^ト化^ス云
大内北野一夜生^シ松^ノ千^本其^所建^ス社^ヲ以^テ可^シ崇^ム天^満天
神と云^ク依^テ之^ニ朝^ム日^守の^傍最^モ殊^ニと^云右^ノ文^子と
カ^ヲを^合々^ク具^ス廟^ヲと^造る。又^タ天^徳之^々右^ノ文^子は
菅原^{モロ}師^{スケ}博^ク改^メ社^ヲ頭^ト造^リ營^スと^云く
北野^{ホクヤ}小^ノ野^ヤ天^ニ神^シ宮^トと^云く在^リ菅^原天^ニ神^シ廟^ト傍^ト可^ク

古公

三

五十步。續日本後紀云仁明帝御宇兼和三年二月為遺唐使祠天神地祇於北野也蓋此神鎮座始乎矣。當社ハ菅原天神地主の社ありて聖廟ありて以前の社也。小野天神と云時ハ此社の事也。小野天神と云時ハ菅原の事なり。同字同名ありて別也。まゝとてりて小野と云

▲筑紫安樂寺小糸流りせしめりて小糸流りせしめりて安樂寺ハ在筑前国御笠郡大宰府天神の所廟所也。或云延喜五年八月十九日安樂寺小初て被建菅公神殿味酒安行とていし人をもとむるなり。一説小糸原仲平此神名の

をとりてとてり。法性坊其社地をさめぬ廟を乃此ふいふの字乃形と換字と。律法ハあふじりて。竈ハ東少をびりて。天到ハあふじりて。深川あふあり。石橋ハあふなり。末ハあふいりて。あふ観音寺あり。於府樓のりてあふいりて。あふいりて。帝王編年記云延喜三年癸亥二月廿五日於大宰府薨御春秋五十九。欲奉葬三笠郡四堂邊御車途中笛而不動仍奉葬其處安樂寺是也矣。筑紫ハ橋川小流也。

▲九別ハあふ小流也。日乃亭ハ花筐小流也。秋津洲ハ竜岡小流也。此の海ハあふ小流也。

こころもろくも物もろくも此の調の乃乃素く小
こころ唐より日本一階調をもろくも乃乃序
惠とひらきその友とこころハる藤と弓ハ横小
流と此調也日々小後とるの何く弓ハ横小
記とひらき一ハ唐の想多し。或とひらき
と云ハハ唐より日本一階調の乃のを和と
ゆふりらと一ハ唐の想多し。

▲梅乃花並まももそそ梅乃花の梢とゆふりらと
古
●梅乃花並まももそそ梅乃花の梢とゆふりらと
長竹集云梅乃花の梢とゆふりらとこころと
梅乃花並まももそそ梅乃花の梢とゆふりらと

時めこころハ野宮小流と十ゆりハる砂小流と
風と逐と潜小開く年のそりり乃松の産小まを
追と忽小くゆふりら乃のそあそ律の惠小るひ
和漢朗詠集云逐吹潜開不待芳菲之候迎春
乍變將希雨露之恩矣 是ハ延喜の序内宴小
進花賦也紀叔望化々乃乃素依依之其乃乃
況と上、白ハ年内の立ま乃乃あると。吹ハ風と
芳菲之候とハま花の並る時と云と。
字書云芳菲茂貌矣 年内のま花をひらき
と潜小開くゆふりらと。下、句ハ立まの氣と逐と
乃小まの氣と逐と。一ハるが保る家の

老松

五

うるゆいと希コヒカひとくふくひりりんとあはるゆ
年のとりりとい年のとり。あふちの神と二可と
ついでり。万葉集小毎年とさくといの
もくよあり。通材集云年のとり年毎こ。
又年の始とく。新古今増抄云あふちの神
とい樹あをとりり神とく。
天部をあふちの神ふなとくとい。仍神乃
恵小なびくりについでり
歩とをとりりあふちの 女守とい女守守を
てきこ。尚社天後云い支那哲合といゆ小
あちとくこ。賤道小治と

▲女守の乃とも実末ゆりや世と乃

女守とい初方の乃ともゆ少治と。世とい。
竈山。天別山等とい。つりまも女守とい
▲天さうり香のありえをも初りすりく花を

あさ枝小香乃治をいひうけり。天部
初治梅少治と

▲雲乃びるる花梅といゆまのあをりゆら
るもあらうや我とい只紅梅殿といあはる
花梅、女守寺の庭小ゆり。拾遺集云なるこれ
ゆりり時家の梅乃花をり。贈大政大臣
「こらふらゆいとせよ梅をさほとてまをりする

縁起云此所伝ふより筑紫東ノ梅の花なるをいふ
是より花梅といふこと

源後恭九州道之記云天心の比守府の天社の
所傳ひし一木とす及し一木中畧
花梅も古木の焼くよりなるふも人の生か
てることをいふ

一書のもを伝ふして花梅のうと小いそのこと不見
紅梅殿と云い菅家乃伝ひし一傳殿乃名と
梅と云い心せしこと一伝ふ名と云ふ

拾芥抄云紅梅殿五条坊門北町尻西町面北野御
子家或云天神御所矣 今葉ふ東坊門の洞流

東へ入小側持常院と云紅梅殿の四跡と一伝
梅の天社と云是也 則花梅乃跡入る少り
紅梅殿少傳ふなる所へ小神次茅云東御門東

三町坐金山天王寺南傍矣

系も所伝ふも 所伝ふとい天社の一木
如しし一木と云ふ所の事と云ふ所伝ふ

いふ所をい老松の 老松も安永寺小なりと小伝を
翁といふこと 實證小伝を

又社壇の神を祀とも是の少小義がなる事ふり
是より安永寺乃系氣をつくりたり。安永寺
のうしりふもふらびえたり。

我々の説文曰高嶺イナ 九列道之記云天正十五年五月廿六日幸府ハ天祚の頃イナ 一と云
及一と云。見おのふまよりりる。彼イナ 寺ハ
七とせ斗ささふやとく。くさ斗なる飯
殿ゆり。四段のまね松松乃多くとさくさふ
さすかふ所くふ所。くさくさくさくさく
えく右の方七八所斗をゆらんといふ。観
者幸す。海小約イナ 乃多くさくさく下畧
障月松園コウリツセウカクのゆ小映ト 障月ハ山乃月也。
劉良注云障山也 其 香山の松樹乃ゆハ月乃指
入る所也。松園とい松の蔭りたるを園といふ
とてさくさく下掛ハ松樹のゆ小映トとくさ
く。そゆとくを

▲南小窠ミナキノ々々る瓊門ユヰゆり斜目竹竿ヤヒツナカシのりく小透スチと
南小窠ミナキノ々々る瓊門ユヰとい安永寺イナの南門ミナと云く。
瓊門ハ結縷小うさくさく門也。瓊ハ玉也。
窠々イナ韻會云静也 其 斜目ハくさく日影也。
竹竿ハ竹の竿ヤハなる色ハ黄ハ只竹也。
▲瓦小火端イナの痛イナ増イナゆり 瓦イナとい安永寺イナの東の瓦
拵イナくさく。増乃改イナと小火端乃取イナを修イナと。
▲翠帳紅圍イナ けく不イナ注と
▲右小古寺イナの旧跡イナあり晨鐘イナ夕梵イナの響イナさるは

先必

右の安不守の如と括く云、古守の如音
守と云ふ。葛家祀所の如と云ふ侍不親者
守共徳達愛と云ふ如く。最徳々梵の言
つけたり。最徳々梵乃雲ハ、如者の勸
と云ふ。親者守の如明守少徳と

△ふりてゑるよ 江戸小徳と

△神乃佛慈愛少く 慈愛とい流文曰

慈愛也 左傳曰上愛下曰慈 北周書蘇綽

敦教化書曰慈愛則不遺其親和睦則無怨於人

△江梅殿も老松も皆末法と現一徳と

江梅殿老松友徳也 安不守少徳あり。

末法とい安不縁あり神と云。或ハ又縁あり

神といも、當時の社司の意なりと多ありと云

神乃多卑小く、以安不對して末法と

云ふ。吾末捨宮も安不對して末法と

△我初よりも江漢家も法と云ふ

漢ハ前漢後漢と云ふ。前漢ハ最初太祖

皇帝より。孺子嬰より十四代合而二百十四

年。後漢ハ最初光武皇帝より獻帝より十

四代合而百九十五年。其漢書小及より

但漢ハ熱多と。安不漢家と云ふいり

と括く云ふ

乙未の宿の日本といはる。唐土少くハ高
 宿とと。秦より以丞相御史乙未大尉為之也
 帝乙未と云爵と。爵の字ハ高砂少宿と
 神さびと失ふたり。神さびと云せたり
 今ハ高宿下掛たる万代の書と云や。乙未
 万代乃書と云やと云ふこと。是ハ神さび
 と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 神さびと云ハ神法乃久しくありと云と
 云。或いけこく困りありと云。山海抄ハ神
 閑神宿と云。又。癸亥の神さびと云つ
 りふも云。乙未と云ふ神さびと云と云と

神道水記

▲風も嘯く乙未の時 兵服水記と

乙未の宿の日本といはる。唐土少くハ高
 宿とと。秦より以丞相御史乙未大尉為之也
 帝乙未と云爵と。爵の字ハ高砂少宿と
 神さびと失ふたり。神さびと云せたり
 今ハ高宿下掛たる万代の書と云や。乙未
 万代乃書と云やと云ふこと。是ハ神さび
 と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 神さびと云ハ神法乃久しくありと云と
 云。或いけこく困りありと云。山海抄ハ神
 閑神宿と云。又。癸亥の神さびと云つ
 りふも云。乙未と云ふ神さびと云と云と

乙未の宿の日本といはる。唐土少くハ高宿とと。

いりかゝるゝとくく〜
竟惠抄云ふ代はやら〜
小姓と〜 宗紙抄云ふ〜
細るゝ小石先云治の〜
と。か〜
若のじ〜
と〜
此ら〜
て〜

○万三カク
○カキ
○タキ
又

我のま〜
年七〜
りり小流り〜

松竹鶴龜のよ〜

古今風俗抄序云後成〜
ひゆ〜
齡〜

内侍竹十首
○日野

淮南子云鶴千歳極其游兵 廣五行記補云龜齡

經万歳又云万年謂靈龜兵

鶴ハ 鶴經曰鶴陽鳥也リ 因金氣依火精火數七金數

尾公

九故十六年小變六十年大變千六百年形定而色
白又曰二年落子毛易黑點三年頭赤七年飛薄雲
漢又七年學舞復七年應節晝夜十二鳴六十年大
毛落茸毛生色雪白泥水不能汚百六十年雄雌相
見目精不轉孕十六百年飲而不食食於水故啄長
軒於前故後短栖於陸故足高而尾凋翔於雲故毛
豐而肉踈行必依洲嶼止必集林木蓋羽族之宗長
仙人之騏驎也 矣

龜 大戴禮云甲虫三百六十四神龜為之長也 矣
禮統曰神龜之象上圓法天下方法地背上有盤法
丘山玄文夾錯以成列宿 矣 玉篇云龜鼈大龜也
矣 爾雅集注云撰龜一名陵龜 矣

本草曰秦龜陶隱居注云此山中龜也 矣

追考

大江佐国元永元年八月七日記云菅原院者是善
卿之家也當初其見南庭有童兒五六歲計是善問
云汝是何家之子答云我并居処又并父母欲以相
公為親也是善知其匪真人而許之此即菅丞相也
矣 亦抄云庭の梅盤りり時男子あくるを
しん是云云

「梅苑」の云ふ所の如くあつたかうあるか否かをたゞし
以てその位をぬく世に菅丞相と化人とすべし

他カ此カ流カ雅カ於カ用カ歟

菅原系圖云總日命十二世孫可美乾飯根命齋野見宿禰賜土師姓天應元年改土師賜菅原姓數代相續至從五位下文章博士是善娶伴氏生菅丞相トモフネ文畧 和論語云菅丞相是善四男母伴氏トモフネ矣

菅家文章云生兼和十二年乙丑矣

拾遺集云菅原大納言トモフネあり一トモフネありトモフネあり
須母のよみトモフネあり
又方の月乃様もトモフネあり家の風をトモフネもトモフネあり

右近

此頃と右近と名付り事 仔細物語云昔
右近のる場のいさりの日びりひよとてな
り車小女の虫乃下シメタス麓シメタスよりがのりふ足
りさの申おるりり男のよみでるりり
「みどもあはれ足もせぬ人のあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
右近のる物いさる大田原の附下系下右近
た近のある場あり。肖セウモン同云一系よりあ
た近西ハ右近也云 河海抄云右近馬

右邊

場、下条大宮也。た邊、馬場、一条西、洞院云々
今之所謂、右邊のる物、よのついで

上方の山、凡長、采り、る、雲井の、ま、で、く、一、ま

次、方、の、河、の、帝、初、を、祝、し、ま、り、て、く、つ、け、り

新梅、枝、の、花、い、ま、し、く、白、ひ、く、ま、井、の、ま、り、ゆ、も、紫

神、是、ハ、麻、治、の、神、職、何、某、と、い、我、り、ま、り

此、神、職、ハ、伊、勢、を、神、宮、の、神、職、と、い、ゆ、り

と、麻、治、の、神、職、と、い、ま、り、ま、り

今、業、昔、倭、姫、皇、女、伊、勢、國、小、ま、り、を、神、の

費、の、修、小、宮、柱、と、五、十、鈴、川、と、い、ま、り、遠、路、小、干

時、以、中、臣、祖、大、鹿、嶋、命、為、祭、主、此、大、麻、治、命、も

伊、勢、命、も、い、ま、り、代、々、仕、伊、勢、神、宮、司、祭、祀、云、云

大常国史及神皇正統記 志、り、あ、ま、り、此、神、職、大、麻、治、
取、意

命、の、後、ま、り、い、ま、り、麻、治、の、神、職、と、い、ま、り

私、云、下、流、伊、勢、内、宮、を、攝、多、と、稱、也、又、小、野

攝、多、明、神、を、社、僧、乃、流、小、大、照、を、神、也、云、云

同、名、同、体、也、ゆ、り、よ、此、何、某、伊、勢、の、神、ま、り

神、職、ハ、一、と、い、ま、り、一、と、い、ま、り、一、と、い、ま、り、一、と、い、ま、り

其、神、明、よ、ま、り、ま、り、一、と、い、ま、り、一、と、い、ま、り、一、と、い、ま、り

よ、か、ま、り、ま、り、ま、り、一、と、い、ま、り

作、の、字、ハ、高、砂、よ、流、也、洛、湯、ハ、神、宮、よ、流、也

神、得、ぬ、い、ま、り、ま、り、一、と、い、ま、り、一、と、い、ま、り、一、と、い、ま、り

右邊

此、新ハ拾遺集表、歌不歌、家、み人、みか
とる。下、句ハ、ぬりた、花乃、花乃、花乃、よ、く、ま、ん、

玄、肯、抄、え、ぬ、り、た、い、ぬ、り、た、こ、い、そ、も、橋、小
の、と、う、つ、一、て、来、色、ハ、ぬ、り、た、花、の、花、の、
く、ま、ん、と、こ、う、く、。 僻、業、抄、え、橋、将、さ、ま、ま、
信、こ、お、り、く、つ、り、ま、い、と、ま、い、と、求、め、ぬ、り、た、い、
策、り、り、さ、け、り、り、た、え、。 愚、者、後、花、を、ぬ、り、
よ、と、く、べ、り、く、く、く、く、

尺素往来云两御所為櫻狩御出于禁野片埜边
小野の表 七本松の色よりぬ紙屋川と限り
本社のめりり皆小社乃社しとく

○律書又守りある一の松をそ少社の表ふえあやぐえ
▲ま、桃、李、花、の、ひ、く、ら、り、の、時

長恨歌云春風桃李花開日秋露梧桐葉落時
言ハ玄宗女妃小別色路ひと後、ま、の、物、花、の、
実、る、も、も、本、葉、の、ち、ら、秋、乃、夕、あ、も、た、ふ、り、て
あ、と、び、一、し、ゆ、と、あ、ひ、時、く、ふ、つ、け、く、。 貴、妃、と、
と、と、と、と、路、り、ぬ、ら、と、

▲あ、く、り、色、ハ、女、帝、花、小、花、を、。 又、後、せ、ハ、柳、橋、の、ま、ハ
盛、久、少、花、を、

▲花、見、車、乃、八、重、一、重、足、く、く、橋、の、色、く、よ、。
八重橋、一、重、橋、を、つ、く、。 又、九、重、の、花、を、い、ひ、く、

お近のる物乃木の居うらうげも白ふや物日るの
物日寺ハ天祥少辨くうつり物りざるはあ小
あり。卒るハ十一面観音と。

指南抄云朝日寺御社西脇観音堂南向ハ矣

釈書云北野宮朝日寺汝門寂珍サシ与右京婢文子アヤコ勲チ

カ造シ之ハ矣

指南抄

○ありふりり小舟の暮乃物日るつくと及ふまのうら

白ふ物日とついでるハまの月乃うらうふ接か
くら乳色と云こ

新古

○物日物白うらとの橋むつとまのうらぬ暮かじたる有

○物日物白うらと小照月のあぶらるまるとうらと

▲まの光もあまるとる林の清き乃物ありと

あまるとる林ハ天後宮とつと。林乃清き

とハ天祥筑紫安系もりり。小舟ハ朝向うとせ

物ふとつと。妻く老松小舟と。清ハ天祥ハ大京清

き小紀と。

○物日物白うらとてはまるとる小舟の暮乃清と云と

▲初花車めぐる目のなるえや少ふつとん

秋ハ月輪あをめぐり物ふあつと月とつと。

まの少とめぐる物ふあつと月とつと。物くまの

目のなるえや少ふつとつとつと。小野の花

見るまの少ふつとつとつと。物くまの

古作

轅の節宮小治を休む田村小治を

後少いひふやとくし

新古。おろしひまきふらりち柳の陰少いふふの

増抄云陰踏とい柳のあこふやとくしとを

とくしとらふのもまうりーがまふらり

柳もまうりーとありーろとてんちんも

とくしとらふとくし

▲実や遠小人をそとくそあまのあ入

皇林陰小治を

右辺のる物乃いとりの日

右今景雅抄云いかりの日とい。毎年八月小春

氏の随方が二交るふまうりーめ小らの納種

とらとまうりーと。と日いた辺の氣ハラとテ最四日

ハ右辺の氣ハラと番五日いた辺のまハラと番。六日ハ

右辺乃まハラと番。其時随方のカチ絹乃尻カチとカチ

とくしとらふいかりとい。と日いた辺の絹

とい装束と。氣ハラと番も同一スカタ染スカタとくしとら

とくしとらふいかりとい。と日いた辺の絹

とくしとらふいかりとい。と日いた辺の絹。文畧

袖中抄云まハラと番の日ハ即の下のをとくしとら

物のサシ指サシ費サシ小くサシをあげど。そのをサシとくしとら

絹の尻カチと勝カチよりあまふ川たとりとあふ

右辺

五

もさめり。あまのハハヒまよ敷乃日とひとりの
目とひとりの。奥義抄えひとりの日。
ゆも乃ま手敷の目。あ月あ日。此日鳥の
虎とひとりのまよびひとりの目とひとりの
僻業抄えお近のる物のひとりの目とひと
ゆとのま結テラヒよ舎人イナともの阿アく。綱と八打
くありとひとりのいんよたふとまの
下徳律伝えひとりの日乃ま。法性寺の夜
ま。あ月あ日。俊頼トシヨリのあふ

此、あひあ日のた近のま手敷とあり。今うま
の業手のあひあ日の右近のまよ敷とあり
あ。

▲見ともあまのむもせぬ人のあまのあやま
あや海をさん 古今集意、一ふ入業手の
あま。あまを右近のる物のひとりの目と
あふとあまのる車の下とあまのる。女乃
あのかのあふまのあまのあまのあまの
あま。古今集雅抄えとあまのあ
あま。あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

右五

いひしき

昔おぼえ今い昔 右邊のる物よふ月
六日弓引ヨシトるふ 左京業平と云人 中ね
くまきり色い 大治の屋小子 くりりるふ 女
車のをくまきり相るあり 凡乃かー次け
るふ 下とくまの吹きとPさりりるふ 女
の敷のりくまきり色い 業平中ね小舎人コトナリ 童
とぬくつひやりりるくまきり

業平の世所く女車とくまきり

停場相倍河と少中ねくりりる男とて
やりりるくまきり 右今集よい左京業平の世

くまきり 慈鎮和尚古今集注云業平右中将也

左近少将時夏カ業平集よい返寄りく
業平の杜るふ

面白く痛く泣きぬくまきり源氏供養ふ源を
のりあやうくまきり色い 右今集よい
右今集よいくまきり色い

右業平の方乃あり 業雅抄とありた
ぬたのあらさくまきり色い ありて
あるくまきり色い ありて
大和相倍と世返寄りくまきり色い

右近

二

うきくらく。あつらふものなるあや
ま。 俊頼、えせむき宿のつらく
らんよ、くくく、いよむく、きー
くくく

▲榻 卒於婆小町不泣也

▲花心 白氏文集十三云花下忘故因美景樽前勸

醉是春風 侍の心は上句花の下乃美系不

ふりて家よゆらんももあつくと。下句は
ま風の真小糸トて海をりてあつらふ

▲百千鳥花ふる色の中あつらふは此寄梅川は流

名小いあふはゆふ流も。時めくは野宮よ流も
花乃こそのめの色さそそく紅梅夜や老松乃

こぞめくは濃深とさ。くくくあつらふとさ。こ
紅梅夜老松乃つさくも小舟ふあふさつら。老松乃

▲一夜松も月くくく 北野小神次第云一夜松社経

藏北東向坐舟宮是也 新十
一夜松千代の事さ乃老あどあもくくあらぬ奉も経

▲あうねさひ世常路ゆきこ志の時ゆきこ世書いんぶど
系う神あつら 万葉集茅一天皇遊猶蒲生野時額

田王作歌 云云 仏是抄云世あを云とる小苗

右左

去りしは、傍定河及橋くまししとく

新六所 此書にせしつらき水船の由樂忌をききさるるはたかみあり

北野の跡所は在勘解由小路北紙屋川西

私云此樂忌は此跡而一所は此を別と

徳は一不のやうは他方の得と

後撰集云延喜の御時水船乃の音小見と

うらまへ

「又らうやう幾その世ふまをくらすの由を徳

袖中抄云此方乃流不見うらまへとく此把大臣

林の象なり。若義形乃音乃時。此樂うと

ましくまらりあり。さそいくらすの世ふま

まてしはありこく。又云後撰河まはんと

しとあふくとつらとを。見らうとく

とまらうらりこ。よのまをさそくけり

▲累代の松の佛原。有明は高松。久方の羽衣不流

▲あまそり林まては橋のまてつら

あまそり林との伊勢天照を林とく

通材集云橋の宮との伊勢田宮のつら

勢陽雜記云橋のまの内宮の宮中あり

二の鳥居より中宮ふあれたの方こ。是を

俗ふさざり橋とつひく。枝のよつと

本ま。そとよ石つこの宮ふくあそ

と云云。五柱皇神又木花岡耶麻命なるもの地
あり云云。仍く極の宮と名付しこやう
坂土佛伊勢太神宮参詣記云櫻宮とす。大宮の
中らうと云ふ妙ふよし。よしとが伊敷もあり。
たぐ一本の桜と神神ととと云ふ。乃が斗
少く宮一のありと云ふ。

續古今集云。乃のりせふてあるふふ
「神風ふふとくどまうせらる桜のまのた乃をらと
宮ふ少中乃極系の神とゆふの宮をらと

宗祇名所集云。櫻系宮老松下。夜堂宮
中ナト也。兵 小神次乃云本社北十二所一殿内其

乃十櫻葉トク 薩戒記云。聖曆一日十句癸句
「つひふあひて梅さくらを乃宮居らる

私云。朱雀東邊流あり。極系明神あり。以
の比此而ふ勸修寺を考。社信流し所。
糸天照を神と云。或云此神宮者上古在右
近馬場。五月荒手番之時。太陽光花降下馬場之頭
也。故世人稱云日降神明トキ

皇のスミヤりしと云。代 新波と流と

上苑トキと明川と。物ケイ朝ケイ九陌キウの塵チリふりり
和漢朗詠集云。長讀閑賦。花明上苑。輕軒馳九陌之
塵チリ下畧 上苑ハ上林苑也。漢武帝の苑也。輕軒ハ

石丘

手之舞之足之蹈之也 孟子曰生則惡可已惡可
已則不知足之蹈之手之舞之上畧 新安陳氏曰
手舞足蹈天理之真樂形見於動容之間不自知者
也矣

▲カネ乃梯

淮南子云王曰公輸天下之巧士作為雲

梯之械設以攻宋上畧 註曰公輸魯班之号時在

楚雲梯攻城具高長上云雲梯故曰雲梯矣

日本紀纂疏云送日於天以瓊矛為梯也矣

丹後風土紀云伊射奈藝尊天為通行而作立梯矣

和歌秘決云雲の材と云ふはりののまゝ

泊瀬乃溪のありて雲の材と云ふはくま

来く泊瀬の萩を供養せしむる記あり

るすし

○いり中坊りるんをくましく又後りめる雲のくはは

▲東南角山をきせぬ浪の

は海波ありありありと云ふる砂は浪と

○月夜此方の海流もいよいよ沈むの勢もあつた

▲所池のあふさぬと云ふ

北野池ハ經藏西連哥會所東也

百練抄云長保二年五月三日北野宮池紫雲云

櫻櫻萌木モエキ揮櫻等也永久三年二月十一日朝觀行

鏑抄曰三月暗多著用之白

幸新大納言樺櫻下襲保安四年二月廿九日朝觀
新大納言櫻萌木二重織物下襲也

衣色目云樺の衣ハありて白くうす紫く
へし二月よき之其介くさるひさくは
花様かむさくくあてあて

花名のとりあさ、新編梅よはと、林のりくせ
はひりりの立田水は

白鬚

白鬚明神者在江州志賀郡打下所祭之神一座也

神祇正宗云打嵐白鬚大明神者様田彦命也

兼邦百首抄云様由彦ハ大神宮少ハ真玉神熱田少

ハ源少夫月名少くハさうハ出少てハふあつち足る

つら少おろくハ少ハ白鬚の明神乃社神ら少この神

身少よ少さ少あ少くハ神少ハ少りの明神は少

私云白鬚の神ハ比良少の精湖水の汀少少

後少少少ハ少ハ少 太平記卷十八云夫斯国の

起ハ家少少少少少少少少其況區也少少ハ

暫記少少少の少少少少少少少少少少少少の減

初人壽二万歳の時迦葉佛西天よか世志終ふ于時太
 聖釈尊得其授記住都卒天終一が我ハ相成乃
 之後遺教流布の地可有何所此南瞻部列と遍花乃
 して所覓ト多小波々なる大海の上小一切衆生悉有
 佛性如来常住年有变易と之浪の音なり釈する是と
 ずるに此波の流を止らんとす一川の口と成くと吾教
 法弘通もり異地とる一と云ふに則此浪の流を
 止小陸と遠小十万里の蒼海と波終ふ此波忽小一系
 の葦乃海中小浮へる少く留小たり此葦の多果一と一
 の流とる今この比叡心の禁大官権現無跡終小波止土濃
 也是故小波止と土濃也とい書る必一其後人壽

百歳の時釈も中天竺摩竭陀国淨飯王宮小降誕一
 終小淨歳十九とく二月上八の夜半小王宮を遁とて六
 多難乃して雪山小捨身寂場樹下小端座と終小又六
 年の後夜小正を成ト後頻大三七日遍小十二年及
 淨虚融の演説三十年一實無相の閑顯ハ箇年を小滅
 度と拔提河の辺双林樹下小唱へ終小維然佛いえ来有
 常住周遍法界の妙體とて一為遺教流布昔葦の多乃
 小と成一南閻浮提豊葦原の中津国小到くと見終小
 時ハ鷄羽不膏合尊の淨代とて一人未佛法の名字とて
 少と不問然共此地大日徧照の本とて一以法東漸
 の異地とるへりまへ何處の所小可開應化利生之門彼

方^{カタ}此^{コノ}方^{カタ}と遍^{ヒロク}歴^{レキ}を修^{シユ}小^コ処^ト小^コ比^ヒ叡^エ山^{サン}の麓^カ。佐^サ々^々名^ナ美^ミ也^ヤ志^シ賀^カの
 浦^{ウラ}の色^{イロ}小^コ室^{シヨウ}河^カ坐^ザせり。若^{ニハ}翁^ウあり。叙^{シヨ}者^{シャ}向^{ムカ}之^ニ翁^ウ若^{ニハ}け^ル地^チの
 主^ヌう^ウく^クハ^ハ此^{コノ}山^{サン}と昔^{マカ}小^コ与^ユふ。成^{シヨク}結^{ケツ}界^{カイ}地^チ佛^{ブツ}法^{ホウ}と弘^{コウ}め^ル今^{イマ}を^ミ
 々^々れ^レハ^ハ此^{コノ}翁^ウ答^{コタ}テ^テ曰^{イハ}我^ガハ人^ニ壽^{シユ}六^{ロク}十^{ジュ}歳^{サイ}の始^{ハジ}り^シハ^ハ此^{コノ}所^{コロ}の^チ主^ヌり^シ
 此^{コノ}湖^{ミヅ}の七^{シチ}度^{タク}と素^ソ原^{ハラ}と妻^メとと見^ミたり。但^{シカ}此^{コノ}地^チ結^{ケツ}界^{カイ}の
 地^チと^ウく^クハ^ハ約^{ヨク}と^ウく^クと可^カ失^シ。叙^{シヨ}者^{シャ}早^{ハヤ}く^ク去^クて。他^カ國^{クニ}小^コ室^{シヨウ}の
 翁^ウと^ウく^ク精^{セイ}と^ウく^ク。此^{コノ}翁^ウハ是^レ白^{ハク}鬚^ソ明^{メイ}神^{カミ}也^ヤ。叙^{シヨ}尊^{ソン}因^{イン}茲^{ココ}寂^{シヤク}
 光^{クワ}土^ツ小^コ室^{シヨウ}らん^{ラン}と去^ク修^{シユ}ひ^ヒたり。叙^{シヨ}者^{シャ}東方^{トウホウ}淨^{ジヨウ}福^{フク}瑞^{ズイ}世^セ男^{ニョウ}の教^{キョウ}を
 醫^イ王^{ワウ}若^{ニハ}遊^{ユウ}忽^{トク}然^ニと^ウく^クあり^シ修^{シユ}たり。叙^{シヨ}者^{シャ}大^{ダイ}小^コ教^{キョウ}表^{ヒラカ}去^ク
 ひて。此^{コノ}翁^ウ若^{ニハ}翁^ウが^カ云^クつ^クる^{コト}と^ウく^ク修^{シユ}たり。叙^{シヨ}者^{シャ}大^{ダイ}小^コ教^{キョウ}表^{ヒラカ}去^ク
 一^{イツ}と^ウく^ク宣^{ノリ}く^ク若^{ニハ}我^ガ叙^{シヨ}尊^{ソン}也^ヤ。此^{コノ}地^チ小^コ佛^{ブツ}法^{ホウ}と弘^{コウ}通^{ツウ}去^ク修^{シユ}り^シ
 る。我^ガハ人^ニ壽^{シユ}二^ニ万^{マン}歳^{サイ}の始^{ハジ}り^シ。此^{コノ}山^{サン}の地^チ也^ヤ。彼^カ若^{ニハ}翁^ウ未^{メイ}知^チ我^ガ
 何^{ナニ}此^{コノ}山^{サン}と可^カ奉^{ホウ}惜^{シヤク}哉^ヤ。核^{カク}級^{キウ}時^ジ至^シと^ウく^ク佛^{ブツ}法^{ホウ}東^{トウ}流^{リウ}す。叙^{シヨ}者^{シャ}ハ
 教^{キョウ}を修^{シユ}り^シ大^{ダイ}師^シと^ウく^クか^クて。此^{コノ}山^{サン}と開^{カイ}闢^{ボク}去^ク修^{シユ}り。我^ガハ此^{コノ}山^{サン}の^チ主^ヌ
 みて久^クく^ク後^{ノチ}五^ゴ百^{ハク}歳^{サイ}の佛^{ブツ}法^{ホウ}と可^カ護^ゴと誓^{セキ}約^{ヤク}と^ウく^ク
 二^ニ佛^{ブツ}名^ナ東^{トウ}西^シ小^コ室^{シヨウ}。修^{シユ}ひ^ヒ小^コ室^{シヨウ}下^カ界^{カイ}

▲若^{ニハ}此^{コノ}山^{サン}の^チ主^ヌり^シと^ウく^ク修^{シユ}り^シ久^クく^ク

新^{シン}十^{ジュウ} 〇おと^{オト}と^ウく^ク修^{シユ}り^シ久^クく^ク此^{コノ}山^{サン}の^チ主^ヌり^シと^ウく^ク修^{シユ}り^シ久^クく^ク

津^ツ守^{シュ}
四^シ妻^メ

▲此^{コノ}山^{サン}の^チ主^ヌり^シと^ウく^ク修^{シユ}り^シ久^クく^ク

此^{コノ}山^{サン}の^チ主^ヌり^シと^ウく^ク修^{シユ}り^シ久^クく^ク此^{コノ}山^{サン}の^チ主^ヌり^シと^ウく^ク修^{シユ}り^シ久^クく^ク

▲江^エ川^{カハ}ハ田^{デン}村^{ムラ}。勅^{トク}使^シハ兵^{ヘイ}服^{フク}九^ク重^{ジュウ}ハ田^{デン}村^{ムラ}。花園^{ハナヅミ}の^チ主^ヌり^シと^ウく^ク修^{シユ}り^シ久^クく^ク
 寺^{テラ}よ^ユ修^{シユ}り^シ久^クく^ク

まの浦のついでに 白鬚とよみか撰津小同名のり竹生徳小波と

後十 〇 徳孫とよむのりついでに秋乃あふりあゆみかたのり 親長

▲未 浦の浦の源氏供養さうりり星海海士の海人よ波と

▲ 風帰帆送る里裡江天渺々水元平舟子解是明朝雨

本文未考追らぬへー

▲ 春の衣やうらびて暮白妙小波花の

やうらひとさの海さうてもおのむくそつと 俗

あくりびとさ 朗詠集清慎公詩云歎冬誤旋暮

春風集 白妙八田村小波と

右 〇 春柳の系よりかたるまきまのそれとてむらやうひよる貫之

▲ あ〜も白妙日記うな

吹流のりも白妙とよみ 吹流のりも白妙とよみ井や橋うらうら

▲ 花さるふ以良の山風吹小りり漕り舟乃波たのり

新古今集巻下宮内つ旁之河さふ五十首あきりし

中小湖上花とさうら 自讀哥洋云こさり舟の波の

白波とさあそとたり 浪のりさうらあし花の舟と

さうらもさうらうらうらうらうら

▲ 天津唐ゆり加路の 後路ハ山姑小波と

十 〇 天津唐ゆり小波の海乃波とさうら唐令 頼政

▲ あさうら〜い賀茂近江の海乃波とさうら小波と

▲ 我ら〜とさうら小波 ともさうら〜流小波とさうらとさうら赤人

のうら〜とさうらとさうらとさうらとさうら

▲此世の起る小劫の初より其況區々ありと之を暫
紀する所の下等小劫は 是の太平記十八卷小劫の起る所の
後劫の初より此は是より以下の初本文といふ事あり

▲天地原小劫の初より後第九の滅劫人壽二万歳の時
初と云ふ成住壞空として此のあり。寂初小劫の初より人壽
生教のありと間と空初と云。是二十劫と云。是れより次小劫
出た来て必初と云を成初と云。其間二十劫と云。是れより
悉備て不足と云と間又二十劫と云。是を住初と云。是れより
次小劫と云と壞初と云。此間二十劫と云。是と八十増減と
云と。壞初より本の初小劫還るより初と九と。是と第十
九の滅初と云と。見禪論

▲迦葉世尊西天小出世の初より大聖釈尊其授記と得く此
年天小劫の初より

迦葉世尊ハ名義集云梵音迦葉波此云飲光二万
歳時出成正覺至百歳時釈迦牟尼居兜率天四種
觀世音 迦葉佛出世のりハ。長阿含經及大論小劫
授記ハ 名義集云梵語和伽那此云授記達磨對多
羅云聖言説与名授果為心期名記矣
兜率天ハ六欲天其一也 名義集云梵音兜率陀此
云妙足新云觀史陀此云知足西域記云觀史多舊
曰兜率陀兜術陀訛也於五欲知止足故佛地論名
意足謂後身菩薩於中教化多修意足故矣

大聖釈尊八百万小記

我八相成道の後、八相といはるの流生海友小出世志は
 つるよ、八相の相あり。此八相小葉大葉のうりりるよ、
 葉よ二降塊卒天。是ハ釈尊都卒天よりあり。よ、
 日降ふ。二詭胎といはる摩耶の胎内よりあり。三降生とい
 四月八日小誕生志はる。此迦城といはる家志はる。小玉
 宮といはる降ふ。五降摩といはる魔王と降伏志はる。六成
 道といはる菩提樹下より正覺志はる。七說法といはる十九年
 が同諸經と説はる。八入涅槃。双林の下より入滅一
 終ふ。又大葉の八相一降塊卒二托胎三住胎四出
 胎五出家六成道七轉法輪八入涅槃也。毒く大藏法
 數小記あり

遺教流布の地約

遺教流布の地約は乃所よりあり。とて
 法華藥王品曰我滅度後後五百歳中廣宣流布於
 閻浮提。在令断絶矣。釈尊の聖教日本よりあり。中
 あり。此教ハ佛法弘通の是地あり

此も瞻部洲とあり

名義集云梵語閻浮提訛云剡浮此云勝金大論云
 閻浮樹名其林茂盛此樹於林中最大提名為洲此
 洲上有此樹林中有河底有金沙名閻浮檀金以
 閻浮樹故名為閻浮洲。中畧西域記云南瞻部洲北
 廣南狹三辺量等其相如車俱舍云瞻部洲人身多

長三肘半人壽無定限矣

三界義云南洲佛出於世教化衆生及佛滅後廣流布遺法東西二洲雖有佛法不廣流布北洲全在佛法僧名矣

漫くとある大海の上一切衆生悉有佛性如來常住無有變易の流乃多一多の芦小洞望く一の流とある今の八宮持現のくしとあり 神社考云台徳家説云于時見

大海閉波浪有梵音釈尊從浪所留止來日本國其波止一蘆浮海上蘆化為一嶋謂之波止土濃今比睿山下太宮推現垂跡之地是也矣

一切衆生悉有佛性ハ涅槃經の文也。大宮持現垂跡之文。ゆしとある小はと。字彙云漫々水廣大矣

其後人壽百歳の時悉達くしとゆひく八十歳のま乃以頭小面右服卧接授乃浪消ゆ 頭小面右服卧ハ

釈尊ハ滅の儀式とく。他を亦記十八卷ハ此文ハ後分涅槃曰世尊於七宝牀右脇而臥頭枕北方足指南方面向西方後背東方如來中夜寂然無声於

是時頃便般涅槃矣 娑婆九十二日問世尊何故令敷設北首臥牀而臥耶答欲顯彼國論師法應尔故謂彼國論師皆敷設北首床而臥世尊亦尔 中畧

問世尊何故右脇而臥答欲顯佛如師子王而臥故如契經說臥有四種謂師子王臥天臥鬼臥就欲者

臥師子王右脇而臥天則仰面鬼則伏面就欲者臥
左脇著地佛是天上人中師子故右脇而臥矣
增一阿含曰北首而臥表於佛法久住北天矣

まふ集
たと下小松と少小とこのめといふらへ小ひとて月とてとて

八十多のまとい佛二月十五日跋提河の邊へ入滅去り
とらへまふ日竜林及安室小記と。釈多壽命之夏ハ

金光明經云八十増上阿含及中阿含云年過八十
胎經云八十有二方等泥洹經云七十九天台玄義
云八十二歳已上

跋提河ハ名義集云梵音曰阿恃多伐底河西域記
云唐言每勝曰曰阿利羅跋提河訛也中畧

梁宗法師云佛来此河邊入滅有意河流奔注若生
死湍速金沙不動喻佛性常住矣 悉達ハ世多の童
名之大原湯養小記と

▲まふといふ常住不滅法界の妙法といふ
釈多の个儼ハ麻生小を常とまめといふが爲の方便といふ

妙法といふ。法花壽量示曰現有滅不滅矣
又曰為度衆生故方便現涅槃矣

▲昔昔のまふ乃治とあり中津とあり後とあり小
日本の教名とあり 日本紀云天照太神勅天雅彦

曰豊葦原中国是吾兒可王之也矣
あえ百首
。スーくれ君うなりそら中津とあり昔昔の世とありて

▲時いらやあそあせとのる乃代色い

地神茅五彦波武鷓鴣羽膏不合尊ハ世と治のゆふ

る八十三万六千四十二年父ハ彦火々出見尊母ハ

竜神の娘豊玉姫ク海濱小産屋とあり用鷓鴣羽為

草膏之豊末合時小児生色ゆふは依てみてみくこと

已上神代卷 秋日本紀云鴈口喉廣飲入魚又吐出

之容易之鳥也是以象產生平安令膏此羽於産屋

風 うらやとさ渚のゆとらりぞ神代と信し始りてたり 光房

▲此殿ハ小恙多小治とさう浪や志賀ハ三井寺小治と

▲佛法結界の地とらと一とのゆい

結界の地ハ佛法のひろゆるをとらとらハ殿ハと指さる

▲在湖の七交と菅原よかーとともさこよんらー一羽らり

翁ハ白鬚明神也。太玉記ハ此湖の七交と菅原と交

じととらとらとら。神社考ハ見湖水変為菅原とら

菅原とらとも菅原とらとも。え来世界のゆらとらと

とら。日本の地名と豊菅原とも。扶桑国たつら。

或云ハ只もゆ小菅原漢と云所あり。昔白鬚明神

曾見漢海変獨而作菅原七回也。本朝樂府ハ之

らりとらとら

方与集 皇の代ハらせー菅原の漢田ハ之交海とらとも 為經

奉自集 〇らりららとらとらとら乃海や又菅原とらとも社せめ

詞林采葉云木師根本中堂と建立志ゆふとて地と

冥き深ひしふ。北の異域あり。八方の溟。蛤の貝多々
有る。是の大師白髮大明神小尸と云ふ。老翁泥と
宣く。此湖水七交素田と云ふ。この遠の昔。葦原乃
津と云ふ。集て伊勢の海。津と云ふ。河の砂と云ふ。此山と云ふ。
末世小佛法。經品の比と云ふ。住劫二十番の河と云ふ。慈
る出世と云ふ。ん。法成と云ふ。と云ふ。と云ふ。

列仙傳曰麻姑謂王方平曰。自接待以來。見東海三
變。為桑田。向到蓬萊水。乃淺於往者。畧半也。豈復為
陵乎。方平曰。東海往復。揚塵耳矣。

寂光土 耶那小法と

河小東方。ろ淨海。唐世。唐の之茶師。忽然と云ふ。ひと

藥師本願經曰。東方去此過十殫伽沙等佛土。有世
界名淨瑠璃。有佛号藥師瑠璃光如來。此佛修道之
時。持瑠璃宝瓶。納一切藥。隨一切衆生之病。出与病
即瘥。云云。十二願中。第七有衆病悉除願。矣。
忽然ハ野宮小法と

と云開闢一と云 開闢三字。たふひと云ふ。あり

説文曰。開闢也。矣。尚書靈耀曰。天地開闢。勞不圖
神代卷曰。開闢之初。洲壞浮漂。譬猶游魚之浮水上。矣。

我も此山の王と成と 茶師如來の伺く。山の王と。則と
王権祝と云ふ。と云ふ。山王権祝ハ本此茶師如來と

共小後五百歳の佛法と云ふ。一と

大集經曰如來滅後有五百、五百云、後五百歲云、第五、
五百也、第五、五百年、末法、初也、矣、天台、金剛經、疏
曰、第一、五百、云、後五百歲、矣、曇無羅識曰、釈迦佛
正法住世五百年、像法一千年、末法一万年、云云
於佛、教等、小、りり、り、り、

▲三佛東西小を給ふ、史、此、の、起、し、云、り、二佛、東、西、小
を、給、ふ、と、云、と、大、正、記、十、八、卷、よ、記、せ、り、を、以、て、作、り、給、ふ、
二、佛、と、い、釈、迦、茶、師、の、二、佛、と、弱、ハ、白、髻、大、明、神、と、

▲天燈、竜燈、神、前、小、來、現、の、時、節、云、り、
江南、野史、云、太、華、山、自、有、天、燈、矣、又、天、竺、小、竜、火、と、
以、て、燈、と、し、り、り、西域、記、小、り、り、又、本、物、小、丹、後

小、天、指、立、小、竜、火、五、九、月、十、六、日、夜、天、燈、竜、燈、法、と、小、
況、と、又、安、養、の、巖、鳩、相、列、江、橋、小、も、竜、燈、出、現、と、り、也、
つ、い、は、り、と、り、

▲老の波ハ、る、汝、小、波、と、ハ、し、女、及、神、さ、び、ハ、候、通、小、波、と、

▲神ハ、人、の、ち、や、ま、小、依、と、威、と、す、と、

御、成、敗、式、目、云、右、神、者、依、入、之、故、増、威、人、者、依、神、之、
德、添、運、矣、神、ハ、人、の、弱、ハ、小、り、て、い、ふ、く、神、の、威、勢、と、
ま、り、人、ハ、神、と、弱、ハ、利、生、の、徳、小、と、り、ひ、と、余、も、と、り、
ま、り、と、り、と、り、と、り、と、

▲河、の、玉、垣、立、田、小、波、と、

▲神、樂、從、馬、樂、と、り、く、小、神、系、方、從、馬、方、と、り、く、梁、塵

秘抄小おくり。道明寺小注と

▲系河ハ姨捨面白ハ三喚。鼓ハ自殘。歩波の姿ハ白ふ。天。松風ハ琴
とあふ。ハ十壽小注と

▲心耳とと平次あり。小 李白詩曰南窓蕭瑟松風

憑誰一鳴清心耳一矣

▲善哉くと感ト法ハハ 陀羅尼品曰佛告諸羅刹女

善哉々々汝等但能擁護矣 大論五十三曰歡喜

讚言善哉々々再言之者喜之至也一矣

▲あやうら 々々のらと天後と之

▲白鬚の神代をさするに代々を成よりり

此はちやうらーかを。神代ハ伊勢の花河。伊勢小限。此と

王井

神代卷曰兄火闌降命有海幸弟亥火々出見尊有

山幸二人相謂曰試欲易幸遂相易之各不得其利

兄悔還弟弓箭已釣釣弟失兄釣每由訪覓故別

作新釣与兄兄不肯受責其故釣弟患即以其横刀

銀作新釣盛一箕与之兄忽曰此我故釣雖多不取

益夜急責故亥火々出見尊憂甚深行吟海畔時

逢鹽土老翁老翁問曰何故在此愁乎對以事之本

末老翁曰勿夜憂吾當為汝計之作每目籠内亥火

々出見尊於籠中沉之于海即自然有可怜小浜於

是棄籠遊行忽至海神之宮雉堞整頓臺宇玲瓏門

前有一井井上有湯津杜樹枝葉扶疏時炎火々出見尊就其樹下徒倚彷徨良久有一美人披闥出以玉鏡來當汲水因舉目視之驚而還入白其父母曰有一希客者在門前樹下海神於是鋪設八重席薦以延內坐定因問其來意時炎火々出見尊對以情之委曲海神集大小之魚遍問之僉曰不識唯赤女比有口疾而不來固召之探其口者果得失鈎已而炎火々出見尊因娶海神女豐玉姬仍留住海宮已經三年彼處雖夜安樂猶有憶鄉之情故太息海神語曰天孫若欲還鄉者當授所得釣夜授潮滿瓊及潮涸瓊而論之曰瀆潮滿瓊者則潮忽滿以此沒溺

如地逼惱則汝兄自伏及將飯去豐玉姬謂天孫曰妾已娠當產不久妾必以風濤急峻之日出到海濱為我作產室相待矣炎火々出見尊已還遵海神之教時兄火園降命既被危困乃自伏從今以後吾將為汝休優之民於是隨其所乞遂赦之後豐玉姬果如前期將其女弟玉依姬直冒風波來到海邊速臨產時請曰妾產時幸勿以看之天孫猶不能忍竊往覘豐玉姬方產化為龍甚慙曰如有不辱我者則使海陸相通永在滿絕今既辱將何以結親昵情乃以草屨兒棄之海邊因海途徑去故因以名兒曰彥波

激武鸕草膏サカケウカサハ不合フキセス尊ミコ後ノチ久之彦ニシメクテ火々出見尊ヒヤヒヤデミミミ崩葬日カタカリシメス
向高屋山上陵タカヤカミノノミ文畧

此、流と玉井と名付らる。今、素小玉井とつゝとた
る。本文へ日本紀神代巻及ヒ天書。旧事本紀等小見へ
を但、備前小玉井社と云ふ。所祭、彦太出見
尊。豊玉姫二座也。此、社の名小よりて此、流と玉井と
云成へ

玉井社者在、備前国幣立山所祭神二座、謂彦火々
出、見尊、豊玉姫也。本地虚空藏菩薩也。昔、讚列那珂
郡有、長者号、和氣丸善茂。天武天皇白鳳十四年し
西有、靈夢初而建宮、讚列那珂西里。又、文武帝大宝

三年癸卯正月廿五日之夜、以、光明赫然、本地虚
空藏菩薩来現と、有、告、宫殿と、讚列より備前の光明
崎小移と、其、後、又有、託宣、今の幣立山小、以、徳座
ありと、平城帝大同元年丙戌弘法大師、敏朝の時、此
所、来て、本地虚を藏の尊像と作る。又、建、立、
華表、額、小玉井宮と記と已上當社縁起
文畧

△アツチヒラクル天アマツチ地ツチひヒけケらラしシまマるルしシまマりリ

神代卷曰、開闢之初、洲壤浮漂、譬、游魚之浮水上、
万、象、仙、足、抄、云、あ、め、ひ、く、く、コト、つ、ら、い、と、づ、ら、
ま、り、と、
天地、温湯、自、言、系、よ、り、り、ま、り、の、こ、ろ、
神代直指抄云、本朝最初、言、倍音、声、の、初、小、あ、め、

地神第一 天照太神 治天二十五万歳

第二 正哉吾勝々速日天忍穗耳尊 治天三十万歳

第三 天津彦火瓊杵尊 治天三十一万八千五百三十二歳

第四 彦火々出見尊 此次より記と

此四代より彦波瀲武鸕鷀羽尊不合尊とお加へく地

神五代と云也。昔月不合尊ハ白鬚小記と

▲火々出見尊とハ我るるり

彦火々出見尊亦名号火折尊此尊能得山幸故号

山幸彦父地神三代天津彦火瓊杵尊也母大

山祇神女鹿葦津姫也治天下六十三万七千八百

九十三歳 神代卷文畧

神代卷云鹿葦津姫一夜而有娠皇孫未之信伊知

懷者必冰我子鹿葦津姫怨恨作每户室入居其内

而誓之曰妾所娠若冰天孫之胤必當焦滅如實天

孫之胤火不能害即放火烧室始起烟未生出之兒

号火圍降命次避熱而居生出之兒号彦火々出見

尊次生出之兒号火明命凡三子矣

▲又も兄火圍降命の 火酸苺命者亦名号火進命

又得海幸故号海幸彦同腹兄也 神代卷

尊命二字者 纂疏云至尊曰尊者指帝者祖宗之

神自餘曰命者指人臣祖先之神命狘令也為臣者

行君之命令也曰尊曰命雖別君臣之義至於人之

所^ニ敬^シ則^シ在^レ貴^レ賤^レ之^レ殊^ニ故^ニ各^ニ訓^メ曰^ク美^ニ拳^等美^ニ拳^等美^ニ拳^等并^テ言^フ
御^ニ事^ヲ吾^レ國^ヲ尊^ム其^レ人^ヲ則^シ言^フ御^ニ事^也矣^ニ兄^トとこのかゝり
えりの子^ノのよとこそめこ兄^ハ才^ハよりとらんはこ

▲釣^ツ針^ヲとらりてあるうう海^ニ魚^ノ小^ノ釣^トとらり小^ノ彼^ノ釣^ト針^トと
魚^トよとらるぬ此^ハ由^ヲと兄^ハ命^ヲ小^ノヤセ^テ唯^ニの^ノ針^トとせせ
宮^ニ入^リ同^ニ火^ノ圍^ニ降^リ命^ヲの^ノ針^トと借^ルといひうけられ^テ借^ル
たふよの^ノ此^ハ兄^ノの^ノ針^トと才^ハの^ノ才^ハと^カ易^カはひて
後^ニ不^レ得^ル其^レ利^ヲ兄^ハ悔^ムと才^ハの^ノ才^ハと^カ易^カと^カ已^ガ釣^ト
針^トと還^ル一^トは^ハと才^ハとせめとらるこ世^ハ活^ルよりの
針^トとせしとらる^{コト}は^ハとらるこ此^ハ魚^ノの^ノ多^クと赤^クせ
云^フ神^代代^ノ赤^ク女^ト赤^ク鯛^也云^フ
天^書書^ハ小^ノ鯛^女と云^フ新^古今^ノ増^抄云^フ女^トと云^フ又^ナ云^フ
とらりてとらる

▲叙^スとらり一^ト針^トとらりてとらるこ^トは^ハた^ハた^ハの^ノ物^トとらる
神^代代^ノ卷^ニ云^フ一^ト書^ニ云^フ以^テ所^ニ帶^テ横^ニ力^ヲ作^ル釣^盛一^ト箕^ト兄^ト兄^ト
不^レ受^ル矣^ニとらると^ハ同^ク云^フ急^ニ責^ム故^ニ釣^ト矣^ニ史^記記^ス晋^世
家^曰日^ノ讓^責矣^ニ
つらつらの^ノた^ハた^ハの^ノ堽^土老^ノの^ノ教^小とらるこ
つらつらの^ノ海^ノの^ノ也^トとらるこ^トは^ハ集^ル小^ノ海^底と云^フ或^ハ
海^神海^童海^童海^童若^シ少^童た^ハ云^フ古^今今^ノ年^ノ雅^抄云^フ
つらつらの^ノ字^ハ小^ノとらるこ^トは^ハつらつらと^ハとらるこ
つらつらの^ノ字^ハ濁^ルつらつらとらるこ

神代卷曰一書伊奘諾尊伊奘冊尊生海神等号少
童命矣 古事紀云生海神名大綿津見神矣

埴土老翁ハ旧事本紀云有一神自号勝国勝長
狹其事勝国勝神者是伊奘諾尊之子亦名謂埴土

老翁矣 纂疏云埴土翁則初作埴之神也翁伊奘
諾之子矣 兼邦和秀百首抄云此老翁ハ赤嵐の

白鬚の明神是也
△吾月籠のたけさふとぐりびをゆ〜

兼邦百首抄云吾月籠ハ大竹をとりて籠とく
〜〜入し〜〜 吾月籠ハ月と細くゆらぬ

籠とかけ〜〜カ〜〜 籠とかけ〜〜カ〜〜
通せり竹〜〜ゆらぬ〜〜ゆらぬ

神代卷云一書云以吾目堅間為浮木以細繩繫著
火々出見尊而沉之所謂堅間是今之竹籠也矣

天書云其籠浮浪登潮敢不覺尊之袖濡自然入御
于海之中矣 纂疏云吾目籠者定惠之喻也吾目

者吾見吾見者吾見也為定籠為智籠之義也為
惠海之喻真如定惠皆歸真如矣

兼神首
△定て多小おの陸海の都と〜〜の都と〜〜の都と〜〜
小〜〜 神代卷云一書云于時海底自有可怜小汀

尋汀進忽到海神豊玉彦之官矣 多小おの江口小波を

▲是乃カハラ海濱の瓦と云々光門あり

竜宮の結ケツユウ海なる神と云々。遊仙窟ユセンクウ云高閣カウカク三重ニメ

悉用クヒタリ瑠璃之瓦ルリノイハ矣

▲門前小玉の井あり 玉タマは林の洞ツツミ。釈名曰井清セイ

也泉清潔者也セイ矣 字林云周云井以不テ変更ル為義ス矣

周書曰黃帝作井ツツミ矣 世本曰伯益作井ツツミ矣

神代卷云一書云門前ツツミ有一好井ツツミ矣

▲銀鋪ギン赫シキと 浪浦シキの字。神代シキの本文シキ小シキアシキと。赫シキの字ハ

海人シキよシキにシキをシキ

▲又湯津ユヅの桂カヅラ乃木カヅラあり 神代卷云井上有湯津ホトリニ杜樹カヅラ

一書云井上有百枝ホトリニ杜樹カヅラ矣 天書云其井上有ホトリニ

木之キ悠ユ津ツ楓カエデ之樹キ矣 湯津ユヅとい湯ユヅハユヅゆユヅと云ユヅ謂ユヅを

神書カミの常トコの清ユヅ・清ユヅ津ユヅのユヅと云ユヅ 釈日本紀云湯者

潔ケツ存サ之義カミ津者休カミ字杜者桂カミ字也カミ矣

▲濁ニリるニリと云乃水ニリの泉ニリと云 云の水ニリハ実盛ニリ小ニリ流ニリと

新ニリ拾ニリ 濁ニリるニリと云の水ニリハ新ニリと云てニ安ニリ常ニリと云の湯ニリの月ニリ 大僧正 良信

▲老ニリせぬニリ口ニリ小ニリ出入ニリや月ニリ日ニリありぬ

和漢朗詠集云保胤カ詩云長生殿ニハ裏ニハ春秋留メリ不老門

前ニハ日月ニハ遲ニハ矣

▲久アキ望アキの天アキちもアキアキアキと云此アキ玉アキの

天アキちもアキアキアキと云此アキ玉アキの天アキちもアキアキアキと云此アキ玉アキの

と云くアキと云久望アキハ羽衣アキ小アキ流アキと

▲月の桂の羽衣はほそ。枝をつつ移くは舟并きよはほそ
たぐも心 林代きよはほそ

▲その次々かきよ女仕二人あり玉の籠よりあそむ
くさくさの乳色ももも。女性二人は姉のきよ玉姫。
妹の玉依姫兄弟とさく。神代きよ一書云海神之
世豊玉姫手持玉鏡来將汲水矣 又云豊玉姫之
侍者以玉瓶汲水矣 玉の籠は玉の炎杯の輝し。
侍名抄小鏡氏也 三教指極小鏡の字をつくまわく
あり。又拈掉とさくも縁つる人とさく

▲玉井小よりをせと月れは桂木の陰小人月々あり
一書云見人影在於井中乃仰視之驚而墜鏡鏡既
破碎不顧而還入謂父母矣
るくさくさるい姿 又くさくさるいかきとさく。人るまよ
りさくさるをさく

▲顔もほ小さくびやのなりさ人あつど足なり
一書云顔色甚美容顔且閑殆非常矣 八雲抄云
るやひやのい情さく 惟清抄云定家流あも
情さくさくさく。さくびとさくさくさく風流さく
さうさくさくさく。天福本小閑 伊物真本

▲天の川糸のほ糸乃さくさく 天の川糸といふ照太糸と
りし。糸線といふ火々出見、さくさくさくさく子乃

みと孫とす之ヲ^{スベ}敬^{アタ}く大孫皇孫と云い一人の名小北

も、四々々^ニ存^ニ紀^ニ小^ニ祢^ニ武^ニ大^ニ皇^ニをとも大孫と云

▲我^ニい^ニせ^ニら^ニとの玉依姫^ノ小^ニ連^ニ枝^ニの名^ト云^フて

玉依姫の豊玉姫の妹^ト。後^ニ鳩^ニ鶴^ニ草^ニ萱^ニ不^ニ合^ニ尊^ニの

妃^トと成^リて、祢^ニ武^ニ大^ニ皇^ニをとも^ス。妻^トく祢^ニ代^ニ、小

皇^ニと云^フ。せうとの背^ニ人^トと云^フ。只^トと云^フ。但^ニ云^フは

妹^トをせうと云^フ。妹^トを接^スとせうと云^フ。た^ニ本

よりとも^ス。又^ニ女^ニの^ニ方^ニより^ニ女^ニとも^ス。通^ニ材

集^スとせうとの兄^ニ弟^ニの^ニも^ト云^フ。連^ニ枝^ニの^ニ兄^ニ弟^ニ

に。亦^ニ存^ニて^ニは^ニ云^フと

▲^イは^ニく^ニす^ニら^ニる^ニ。卒^ニ都^ニ婆^ニ小^ニ町^ニ小^ニ江^ニと

▲^イは^ニく^ニす^ニら^ニる^ニ。大^ニの^ニ引^ニは^ニあ^ニま^ニの^ニん^ニら^ニ

祢^ニ小^ニ江^ニと^ニ云^フ。太^ニ麻^ニハ^ニ紙^ニと^ニ麻^ニと^ニ云^フ。あ^ニて^ニ賢^ニ本

と^ニ云^フ。竹^ニと^ニ串^ニ二^ニ本^ニ小^ニ江^ニと^ニ云^フ。惟^ニ清^ニ抄^ニ云^フ。太^ニ麻^ニハ^ニ幣

帛^ト也^ト。祢^ニ小^ニ麻^ニの^ニ草^トと^ニ長^ニく^ニ分^ニる^ニと^ニ云^フ。枝^ニの^ニ具^ニと^ニ云^フ

伊^ノ大^ニの^ニ引^ニは^ニあ^ニま^ニの^ニん^ニら^ニる^ニ。成^ニぬ^ニと^ニ云^フ。只^トと云^フ。た^ニ本

愚^ニ見^ニ抄^ニ云^フ。枝^ニハ^ニあ^ニま^ニの^ニん^ニら^ニる^ニ。と^ニ云^フ。ひ^ニと^ニ云^フ。あ^ニま^ニの^ニん^ニら^ニる^ニ

麻^トと^ニ云^フ。各^ニ々^ニづ^ニる^ニ。あ^ニま^ニの^ニん^ニら^ニる^ニ。引^ニは^ニあ^ニま^ニの^ニん^ニら^ニる^ニ

ま^ニ名^ニ本^ニ小^ニ江^ニ麻^ニと^ニ云^フ

▲^イは^ニく^ニす^ニら^ニる^ニ。あ^ニま^ニの^ニん^ニら^ニる^ニ

う^ニら^ニは^ニけ^ニい^ニ知^ニと^ニ云^フ。あ^ニま^ニの^ニ知^ニと^ニ云^フ。卒^ニ都^ニ婆^ニ小^ニ町^ニ小^ニ江^ニと^ニ云^フ。あ^ニま^ニの^ニ知^ニと^ニ云^フ

函材集云うらひけいやくと云らる

○おほくふらふかもあつたれいりうめく社とあつて

▲やうてかたつらふあせま

一書云還入謂父母也 袖中抄云かといふと云

りろといふと云又りろりごとさうさふあるがも

みろく 纂疏云父母和訓曰加曾伊呂波加曾撰

言數也曾須音通人幼時父教之以一十百千之數

伊呂波者和字四十七字也人之為母者以四十七

字始教其子也四十七字天地自然之声矣

▲然とい雑堞整頓臺宇玲瓏

本文上よ記也 旧事本紀云城舎崇華樓臺玲瓏

矣 纂疏云城高一丈三尺曰雉城上女牆曰堞整

頓謂存整有次也臺則觀四方而高者宇則屋四無

者玲瓏明貌矣 玉篇云城高一丈三尺為雉矣

鄭玄周礼注曰雉長三丈高一丈矣 左傳曰環城

傳於堞堞女牆也矣 文選注云堞城上短牆也矣

臺頓ハ竜宮の有後種々の汚ととのありと云

臺宇ハくくまるといふと樓ハ玲瓏ハ増韻云明貌

文選曰珊瑚幽茂而玲瓏矣 遊仙窟云玲瓏映日

註玲瓏者分明貌矣

▲中乃八重と云 本文上よ記也 纂疏云礼

器曰天子之席五重諸侯之席三重太夫再重此曰

八重者尊之義ハ之數陰道也 矣 新日本紀云新

掌祭神今食神熊之時神座八重疊横之者也 矣

兼印百目 ○ 小室いさよとていさよいさよの事をあてひるん

▲釣針 釣の一字をつりとりとがむ

▲潮満潮涸のありの玉とさるふもりなり

本文上より記す 秋日本紀云此満瓊涸瓊二種在

何処哉先師申云元暦之頃宇佐宮監行之時本宮

注文満瓊涸瓊二種在當宮之由注進 矣 神代卷壘

加之抄云神宮皇后時満于之玉是也 矣 神社考云旧傳云

皇后勅磯良乞干珠満珠於龍宮龍宮乃献兩珠皇

后於是以兩彩珠祭向三韓時皇后投于珠潮退為

陸三韓士卒下舟相戦皇后又投満珠潮忽来溺死

者不知數 中畧或説曰干珠満珠者納于紀列日前

宮一云干珠満珠納干肥前国佐嘉郡河上宮 矣

私云按皇后以干珠満珠三韓退治之事日本紀每

之且又亥火々出見尊之時干満珠神宮皇后時干

満珠共云一物未見證文可尋追而

經本紀云王仁云奉潮溢瓊者曰教潮満之時進

潮涸瓊者曰教潮乾之時也 矣

新 外祖のさみくさいつの海の塩干塩みかろりかみ

外祖とろりく 外祖ハ母方の親をとく ちる玉娘の

親く 号ス豊玉彦トス

親く 号ス豊玉彦トス

▲有明 多砂の流

▲大鱈小宗一とありとあり

一書云棄火々出見尊於大鱈以送致本御矣

一云遣下尋鱈魚以奉送矣 又云海神所乘駿馬

者八尋鱈也 兼邦百首抄云鱈ハ竜宮の馬也

文選劉良注曰鱈魚長二丈餘有四足似鼉喙長三

尺甚利齒虎及大鹿渡水鱈擊之皆中断生則出在

沙上乳卵卵如鴨子亦有黃白可食斬其頭極去齒

旬日間更生廣州有之矣 又てハ凡之暴風と

云旧事本紀ハ迅風と云

▲金銀ワんワ小玉とあり

ワんワハ旧抄云梳裏と云秋々々 講述抄云玉鏡注

云鏡字出取未詳古語謂梳為磨利矣 纂疏云鏡

當作梳益同小孟也此梳瓶之意也矣

▲まうとの君乃命小あさりい まうとのハ火々出見と

指と云く日本紀小客氏 真人氏云

▲昔ハ揚貴妃小流と桂の葉ハ卒都波小町小流と雲と廻

とハ融と流す

▲染ハ老龍の雲よつてうきり

老龍の字ハ詩人玉屑云学海波中老龍矣

白玉瞻云老龍獨卧似禪僧矣 蟠野王按龍蛇卧

顔矣

又蛭蟪と云 文選魯靈光殿賦曰 虵蟪蟪蟪以蛭
蟪呂延濟注曰 蛭蟪盤屈自矣 廣雅曰 未外天曰
蟪龍矣



▲うせ杖ウセ小コすスろロ 倭名抄云漢語抄云 魁ケイ加カ世セ都ツ惠ヱ矣

伊呂波字類抄云 鹿杖カシ横ヨク首杖ウヘと云

筑波回音序云 うせ杖ウセ小コとトろロてテ欄カドのノ作モノへヘまマよヨろロてテ首

とトまマくク忍ニまマさサらラぬヌもモふフくクくクどドんンーー 上下皆

まマくクあアまマまマのノ齡レイ六ロク十ジュウ小コ迫オクりリんンとトあアらラるル扇セン姿サの

髪カミ髭ヒゲ白シロくク末スエ二ニ股マタうウるルせセ杖ウゼ小コとトつツ庭ニワのノ灯トウ炉ロの

平ヘ小コまマとトくク少シ一イチ拜イハむムをヲ文モノ畧リョク

私シ云クうウせセ杖ウゼのノ席セキのノ角ツノにニ似ニてテ股マタあアるルとト云ク

▲五丈の鯨小のせとろり

神代カムヤマト考コトよヨ一イチ尋ヒロク鯨クジ八ハチ尋ヒロク鯨クジあアらラるルをヲ定サまマふフ五イハ丈サツのノ鯨クジと

つツひヒえエとトろロりリ 經キヨ教コウ本ホン紀キ云ク王オウ仁ニ云ク八ハチ尋ヒロク鯨クジ者モノ曰ク八ハチ間マ

舟フネ一イチ尋ヒロク鯨クジ者モノ曰ク一イチ間マ舟フネ矣ナリ

Handwritten characters at the top right of the right page.



五井



Handwritten text in vertical columns on the right page, including the characters '五井' and 'の'.

Handwritten characters on the left page.

Handwritten characters on the left page.

Handwritten characters on the left page.

Handwritten characters on the left page.

Handwritten characters on the left page.



